

# 美浜町内遺跡発掘調査報告書 I

興道寺遺跡 (中ノ丁1区)

藤ノ木遺跡

竜沢寺遺跡

興道寺遺跡 (土井ノ上2区)

興道寺古墳群 (中町2区)

早瀬遺跡

興道庵寺遺跡 (洲ノ上1区)

寺山古墳群 (1号墳)

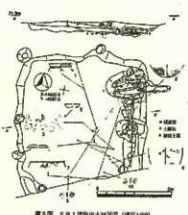
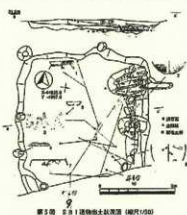
2003

福井県美浜町教育委員会



美浜町内遺跡発掘調査報告書Ⅰ 正誤表

平成 15 年 4 月 1 日現在

頁	行	誤	正	備考
4		社会福祉法人美方福祉	社会福祉法人美方福祉会	表 1
3		 <p>第5図 SX1遺跡出土状況図 (縮尺1/500)</p>	 <p>第5図 SX1遺跡出土状況図 (縮尺1/500)</p>	表 5 図
28	9	ブロック	ブロック	
35	6・8	福井県埋蔵文化財調査センタ	福井県埋蔵文化財調査センター	
二段目右側		SX1製塩土器出土	SX1検出(東から)	図版 10

## 序 文

美浜町には約130ヶ所に及ぶ遺跡が残されています。過去に発掘調査が行われた獅子塚古墳、興道寺窟跡、口背湖遺跡、浄土寺古墳群、松原遺跡など、ここに全てを記すには枚挙に暇がありませんが、いずれも若狭地方の古代を考える上で重要な遺跡群です。

本書には、美浜町教育委員会が平成12年度から同14年度までに実施した発掘調査、試掘調査のうち、国庫補助金、県費補助金によって行われた調査の結果が収録されています。

本書が多くの方々に活用されることにより、遺跡保護についてより一層の理解、認識を深め、文化財愛護、郷土愛の啓発、普及につながることを切望いたします。

なお、調査に際しては、関係者各位、町民の皆様のご心温まる御支援がありましたことに心より御礼申し上げます。今後も文化財保護・活用のために全力を尽くす所存でありますので、変わらぬ御支援を賜りますようお願い申し上げます。

平成15年3月

美浜町教育委員会  
教育長 浅妻 保

## 例 言

1 本書は、美浜町教育委員会が平成12年度から同14年度までに国庫補助金、県費補助金の交付を受けて実施した埋蔵文化財の調査報告である。調査地は表1、第1図に掲げた。調査遺跡の収録は調査年次順とした。

2 調査体制は下記のとおりである。

- 調査主体者 西野善代二 (美浜町教育委員会教育長、平成12年度)  
 浅妻 保 (美浜町教育委員会教育長、平成12～14年度)  
 事務局 南 正明 (美浜町教育委員会事務局長、平成12年度)  
 中川利夫 (美浜町教育委員会事務局長、平成13～14年度)  
 西田 宏 (美浜町教育委員会事務局文化財保護活用政策参事、平成12～13年度)  
 東田仁幸 (美浜町教育委員会事務局文化財保護・町誌編纂室長、平成14年度)  
 担当 松葉竜司 (美浜町教育委員会事務局文化財保護・町誌編纂室学芸員、平成12～14年度)  
 調査員 上山智也 (美浜町教育委員会事務局嘱託、平成12年度) 原田絹代 (同、平成13年度)  
 調査作業員 秋山喜久枝、伊藤和子、今村清治、上野山登、上村芳男、大村義弥、木村孝、金谷幸子、川口瑞絵、川畑良樹、木村孝、久保正、久保正男、小林三雄、小山友、塩野悦子、鈴木梨沙、高木武太郎、武田絵理、武長照江、田村千賀子、道幸明、中原あゆみ、西田幸子、橋本友美、原田美代子、藤長和夫、宮下恵子、山本剛、吉本正治、綿田さだ江

3 調査対象地位図は国土地理院発行1/50,000地形図、調査区位置図は美浜町発行1/2,500地形図をそれぞれ一部変更して使用した。

4 挿図に示す方位は磁北である。挿図中に国土座標値を示すものは調査当時の第IV座標系に基づく。

5 遺構番号は調査時の番号を再整理した。遺構一覧表中、遺構平面・断面図の分類基準は以下のとおり。

平面Ⅰ 円形のプランをもつもの。正円に近いものをa、長楕円形のものをもつものをbと細分する。

Ⅱ 方形のプランをもつもの。正方形に近いものをa、長方形に近いものをbと細分する。

Ⅲ 長方形のプランをもつもの。Ⅳ 不定形のプランをもつもの。

断面Ⅰ 丸底状であるもの。深さにより、浅い方からa、b、cとに細分する (以下、同)。

Ⅱ 平底状であるもの。Ⅲ 尖底状であるもの。Ⅳ 不定形であるもの。

6 遺物実測図の縮尺は1/3を基本とした。図中の遺物断面は須臾器を黒塗り、その他の遺物を白抜きとした。

7 本書の執筆、編集は松葉が行った。

8 現地調査・報告書作成で下記の機関・個人に御指導、御協力を賜った。(敬称略)

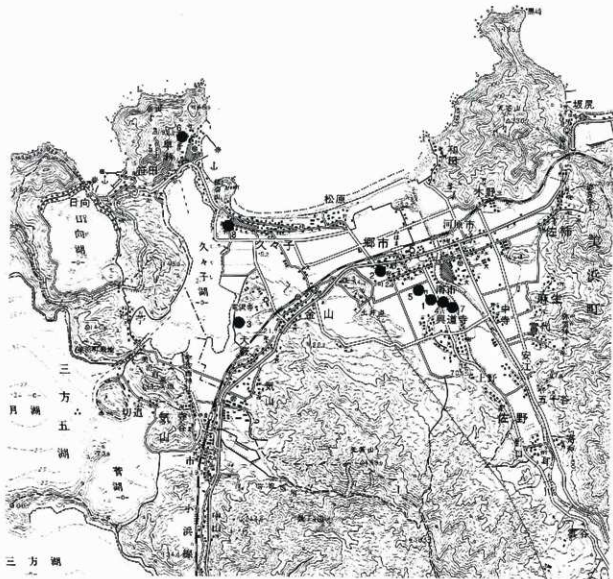
福井県教育庁文化課文化財保護室、福井県教育庁埋蔵文化財調査センター、美浜町土木開発課、美浜町シルバー人材センター

赤澤徳明、鯉本真由美、網谷克彦、入江文敏、(故) 武長篤行、大同芳男、鳥居直也、中西昭二、中野拓郎、畠中清隆、服部修一、松川雅弘、水野和雄、三辻利一、森川治、山口悦子、山口充

9 出土遺物、記録類は美浜町教育委員会文化財保護・町誌編纂室が保管している。

番号	遺跡名	当地	所在地	調査者	土地所有	調査機関	目的	発掘調査期間	発掘面積	調査担当者
1	西沢寺遺跡	中ノ下1区	福山町西沢寺町3丁目127番	武長篤行	国庫所有	国庫調査	二重底溝、惣門跡に併せ 埋蔵文化財	平成12年8月17日～19日共13日	40㎡	松葉、原
2	山ノ下遺跡		福山町山ノ下町110番	浅妻保夫	民有	民間調査	瓦葺土壇、石室等埋蔵文化財	平成13年5月5日～5月31日共26日	40㎡	松葉
3	西沢寺遺跡		福山町西沢寺町3丁目4番	松葉竜司	国庫所有	国庫調査	土壇遺構、惣門跡に併せ 土壇周辺部	平成13年5月4日～5月5日共2日 平成13年7月9日～7月20日共12日	40㎡	松葉、原
4	西沢寺遺跡	二ノ下2区	福山町西沢寺町3丁目23番	松葉竜司	民有	民間調査	土壇遺構に併せ土壇周辺部	平成13年7月23日～7月24日共2日	56㎡	松葉
5	西沢寺遺跡	中ノ下2区	福山町西沢寺町3丁目11番	浅妻保夫	民有	民間調査	土壇遺構に併せ土壇周辺部	平成14年4月4日～4月12日共9日	47㎡	松葉、原
6	早瀬遺跡		福山町早瀬町4丁目1番	浅妻保夫	民有	民間調査	土壇遺構、惣門跡に併せ 土壇周辺部	平成14年5月15日～5月26日共12日	24㎡	松葉、原
7	西沢寺遺跡	中ノ下1区	福山町西沢寺町3丁目11番	浅妻保夫	民有	民間調査	土壇遺構、惣門跡に併せ 土壇周辺部	平成14年7月1日～7月17日共17日	49㎡	松葉
8	西沢寺遺跡	上中町	福山町西沢寺町3丁目11番	浅妻保夫	民有	民間調査	土壇遺構、惣門跡に併せ 土壇周辺部	平成14年6月24日～7月11日共17日	49㎡	松葉

表1 調査対象地一覧



第1図 調査対象地位位置図

## 本文目次

I	興道寺遺跡（中ノ丁1区）調査報告	1
II	藤ノ木遺跡調査報告	9
III	竜沢寺遺跡調査報告	13
IV	興道寺遺跡（土井ノ上2区）調査報告	16
V	興道寺古墳群（中町2区）調査報告	18
VI	早瀬遺跡調査報告	21
VII	興道廃寺遺跡（測ノ上1区）調査報告	27
VIII	寺山古墳群（1号墳）調査報告	37

### 挿 図 目 次

第1図 調査対象地位置図		
興道寺遺跡（中ノ丁1区）		
第2図 調査区位置図	1	
第3図 調査区平面・土層断面図	2	
第4図 SB1平面・断面図	3	
第5図 SB1遺物出土状況図	3	
第6図 SB1-SX1～2平面・断面図	4	
第7図 SA1平面・断面図	5	
第8図 SK2～6平面・断面図	5	
第9図 出土遺物実測図	7	
藤ノ木遺跡		
第10図 調査区位置図	9	
第11図 調査区平面・土層断面図	9	
第12図 SB1平面・断面図	10	
第13図 出土遺物実測図	11	
竜沢寺遺跡		
第14図 調査区位置図	13	
第15図 出土遺物実測図	14	
第16図 調査区平面・土層断面図	15	
興道寺遺跡（土井ノ上2区）		
第17図 調査区位置図	16	
第18図 調査区平面・土層断面図	16	
第19図 出土遺物実測図	17	
興道寺古墳群（中町2区）		
伝古墳群出土須恵器実測図	18	
第21図 調査区位置図	19	
第22図 調査区土層断面図	19	
早瀬遺跡		
第23図 調査区位置図	21	
第24図 1トレンチ平面・土層断面図	22	
第25図 2トレンチ平面・土層断面図	22	
第26図 SX1～4平面・断面図	24	
第27図 出土遺物実測図	25	
興道廃寺遺跡（測ノ上1区）		
第28図 調査区位置図	27	
第29図 調査区平面・土層断面図	28	
第30図 SB1平面・断面図	29	
第31図 SA1平面・断面図	29	
第32図 SX1・SK1～4平面・断面図	30	
第33図 SD1平面・断面図	31	
第34図 出土遺物実測図1	33	
第35図 出土遺物実測図2	34	
寺山古墳群（1号墳）		
第36図 調査区位置図	37	
第37図 伝古墳群出土須恵器実測図	37	
第38図 1号墳地形測量図	38	
第39図 1号墳平面・断面図	40	
第40図 1号墳石室図	41	

## 表 目 次

表1	調査対象地一覧 興道寺遺跡(中ノ丁1区)		表7	遺物一覧表 興道寺遺跡(土井ノ上2区)	15
表2	遺構一覧表	6	表8	遺構一覧表	17
表3	遺物一覧表 藤ノ木遺跡	7	表9	遺物一覧表 早瀬遺跡	17
表4	遺構一覧表	11	表10	遺物一覧表 興道庵寺遺跡(湖ノ上1区)	26
表5	遺物一覧表 竜沢寺遺跡	12	表11	遺構一覧表	32
表6	遺構一覧表	14	表12	遺物一覧表	35

## 本 文 写 真 目 次

	興道寺遺跡(中ノ丁1区)		写真3	作樂風景 寺山古墳群(1号墳)	23
写真1	現地説明会風景	1	写真4	2号墳	38
	早瀬遺跡		写真5	3号墳	38
写真2	海岸段丘崖	21			

## 図 版 目 次

図版 1	興道寺遺跡(中ノ丁1区)	図版 11	早瀬遺跡
図版 2	興道寺遺跡(中ノ丁1区)	図版 12	早瀬遺跡
図版 3	興道寺遺跡(中ノ丁1区)	図版 13	興道庵寺遺跡(湖ノ上1区)
図版 4	藤ノ木遺跡	図版 14	興道庵寺遺跡(湖ノ上1区)
図版 5	藤ノ木遺跡	図版 15	興道庵寺遺跡(湖ノ上1区)
図版 6	竜沢寺遺跡	図版 16	興道庵寺遺跡(湖ノ上1区)
図版 7	興道寺遺跡(土井ノ上2区)	図版 17	興道庵寺遺跡(湖ノ上1区)
図版 8	興道寺古墳群(中町2区)	図版 18	寺山古墳群(1号墳)
図版 9	早瀬遺跡	図版 19	寺山古墳群(1号墳)
図版 10	早瀬遺跡		



# I 興道寺遺跡（中ノ丁1区）調査報告

## 1 調査概要

調査地は興道寺遺跡の北東縁部に位置し、標高214mの耳川左岸低位段丘面に立地する。弥生時代後期から中世までの複合遺跡であり、興道寺地係をほぼ含むように広く展開する。調査地周辺では美浜町教育委員会による数度の調査、福井県埋蔵文化財調査センターによる発掘調査が行われており（繪本2002）、律令期を中心に古墳時代後期から中世に至るまでの遺構群が検出されている。また、遺跡が立地するこの河岸段丘面には集落遺跡（興道寺遺跡、藤ノ木遺跡）、墳墓遺跡（獅子塚古墳、興道寺古墳群）、生産遺跡（興道寺窯跡）、寺院遺跡（興道庵寺遺跡）などの多様な遺跡分布が認められる。

調査地は1997年に発掘調査を実施した土井ノ上1区調査地<sup>1)</sup>から町道金安線を挟んだ南西隣の水田である。調査に際しては土井ノ上1区調査地で検出した律令期集落遺構の西への広がりも考慮して建物物基礎部分に464m<sup>2</sup>の発掘調査区を設定した。



写真1 現地説明会風景

## 2 基本層序

上層から、第1層：灰褐色砂質土（耕作土）、第2層：黒色砂質土～粘質土（遺物包含層）、第3層：暗褐色～極暗褐色粘質土（部分的に礫混入、旧表土層）、第4層：褐色粘砂土（段丘表層）、第5層：にぶい黄褐色粘質土・砂礫～褐色粘質土・砂礫（径30cmまでの礫混入、段丘構成層）である。第1～2層において須恵器杯類の破片を数点採集した。

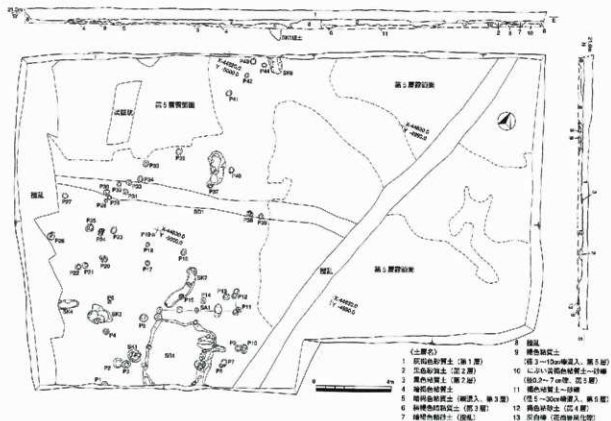
第1層下、調査区西側に標高約20.5～21.0mに第2層がほぼ水平に分布する。調査区南西部に第3層が存在しない範囲が認められる。

調査区南東から北西に向かって標高約20.5～21.0mに第4層が緩やかな傾斜をもって分布するが、調査区南東部では第1層下に第4層上面、あるいは部分的に第5層上面、花崗岩風化礫が露頭し、また調査区北東部、北西隅には第1層下に攪乱が入り込んで第4層に至るなど全体的に調査区東側で第2～3層の削平が顕著である。

律令期の遺構面となる第3～4層の上面レベルを復元すれば、調査区外東側の町道金安線付近を最高位とし、土井ノ上1区調査地、及び中ノ丁1区調査地に向けてそのレベルを低下させる極微地形<sup>2)</sup>を有していたものと推測され、かつての高位面上の遺構は調査区の遺構分布にみるとおり既に削平によって消失していると思われる<sup>3)</sup>。



第2図 調査区位置図（縮尺1/2,500）



第3図 調査区平面・土層断面図 (縮尺1/200)

### 3 検出遺構

調査に際しては、第3層、及び第4層上面に精査の主眼をおいた。検出された遺構は、竪穴建物1棟 (SB1)、柱列1基 (SA1)、土坑6基 (SK1~6)、溝1条 (SD1)、小穴44基 (P1~44) である。

#### 竪穴建物

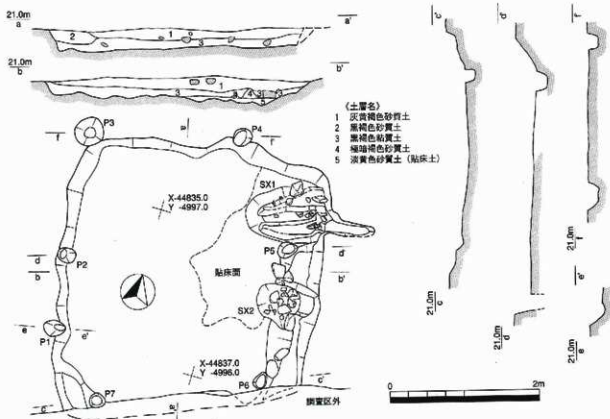
SB1は一辺がやや直線性に乏しい歪な正方形であり、建物西縁掘り形で13度西偏する。南北3.64m、東西3.56m、深さ0.41m。灰黄褐色砂質土、黒褐色粘質土を覆土にもち、標高20.7m前後に径10~20cm程の礫が多量に埋没する。

床面は第5層上面まで掘り込み、標高20.6m付近に位置する。北東隅のカマド左前面の範囲に淡黄色砂質土を叩き締めた貼床面をもつ。

遺物は床面直上から土師器壺3点 (1~2)、製塩土器1点 (3) が、覆土から須恵器杯B蓋2点 (4)、杯A1点 (5)、杯B1点 (6)、土師器壺6点 (7~8)、製塩土器8点 (9~10)、鉄釘1点 (11) がいずれも破片で出土した。1~2はそれぞれ覆土中のもと接合関係にあり、3は接合関係にある3片を含めた床面出土の4片で一個体を構成する。覆土中の土師器壺3点 (7)、製塩土器3点 (9) はカマド付近から出土した。

建物にはカマド1基 (SX1)、集石遺構1基 (SX2)、柱穴7基 (P1~7) を伴う。

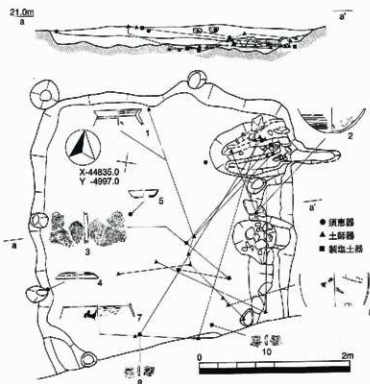
SX1はSB1北東隅に造り付けられたカマドであり、掘り形、両袖部と煙道部からなる。掘り形端部一煙道端部長1.74m、両袖部長0.89m、煙道部長0.69m、掘り形最大幅0.78m、両袖部最大幅0.67m、右袖部最大幅0.24m、左袖部最大幅0.24m、煙道部最大幅0.2m。標高20.6m付近に煙道部底面、及び両袖残存部の上端を検出した。右袖部は拳大程の礫を芯材として淡黄褐色粘土を叩き締め、さらに上位を褐色土で



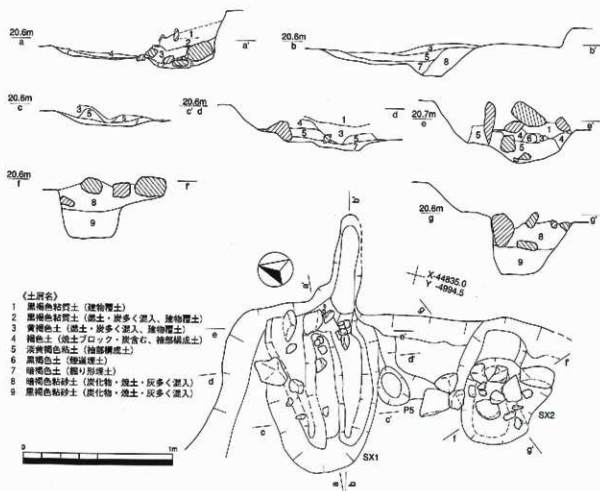
第4図 SB1平面・断面図(縮尺1/50)

固めるが、左袖部は淡黄褐色粘土の  
 叩き締めのみが残存する。右袖最奥  
 部は砂岩礫を縦位に据える。両袖部  
 ともに被熱し赤変する。カマド支脚  
 は認められない。煙道部は両袖部の  
 主軸から南に逸れ、左袖部の延長上、  
 建物外に延びる。両袖部と煙道部と  
 の主軸のズレは袖部の造り直しを示  
 唆している。煙出し部は叩き締めた  
 淡黄褐色粘土の上に礫を芯材として  
 褐色土を固めて整地し、さらに大ぶ  
 りな礫を上部に積むことによりトン  
 ネル状に造る。カマド上部には焼土、  
 炭が多く混じる黄褐色土、建物覆土  
 の黒褐色粘質土が堆積する。

カマドを断ち割ったところ、右袖  
 部褐色土中に須恵器杯A口縁部片が  
 混入した状態で出土した。



第5図 SB1遺物出土状況図(縮尺1/50)



第6図 SB1-SX1~2平面・断面図 (縮尺1/25)

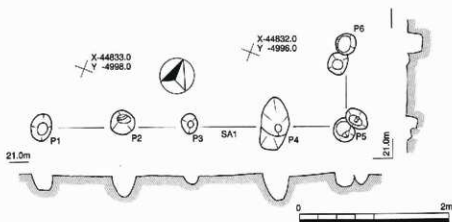
SX2はSB1床面東縁中央部付近、SX1南側で検出した。東西、南北ともに0.57mの崩れた楕円形であり、土坑状に掘り込む。標高20.6m付近、床面と同一レベルに5~16cm程の砂岩、花崗岩礫の平坦面を上に向けて不規則に配する。敷石の被熱状況は明確ではない。遺構の深さは0.54mで、敷石の下部は径2cm程の礫が混入する暗褐色粘砂土、黒褐色砂質土を埋土にもち、ともに多量の炭化物、焼土、灰が混じる。土師器甕細片2点が暗褐色粘砂土から出土した。

なお、建物東縁掘り形に沿って第4層を意図的に掘り残した最大長1.83m、最大幅0.32mの細長い棚状平坦面が認められ、前面にやや大ぶりな礫を備えている。

P1~7はいずれも建物壁面に沿って、P1を除く6基で六角形に配される。いずれも円形の掘り形をもち、規模も径0.2m程とP3を除いて比較的近い。底面まで浅く、埋土はいずれも黒褐色土からなる。明確な柱当たりをもたない。いずれも出土遺物はない。

#### 柱列

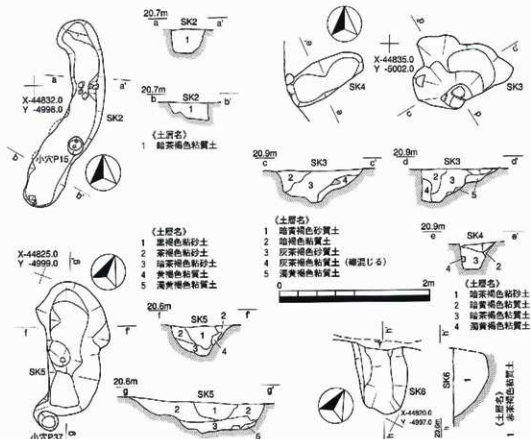
SA1は、SB1の北側に東西4間×南北1間を検出した。東西4.05m、南北1.10m。柱穴6基(P1~6)で構成される。いずれも円形の掘り形をもち、規模は径0.3m程。底面レベルは20.6m前後である。黒褐色土の埋土をもつ。P4、P5で柱当たりを確認した。P5は小穴P11を切り、P6は小穴P12に切られる。P1埋土から土師器甕片が、P2埋土から薄手の製塩土器片がそれぞれ1点出土した。



第7図 SA1平面・断面図(縮尺1/50)

### 土坑

SK 2は南北2.54m、東西0.47mの溝状の平面形。深さ0.32m。小穴P15に切られる。SK 3は東西1.34m、南北1.04mの楕円形。深さ0.43m。SK 4は東西検出1.04m、南北0.47mの長楕円形。深さ0.40m。SK 5は南北1.74m、東西0.88mの崩れた楕円形。深さ0.54m。小穴P37に切られる。SK 6は南北検出0.86m、東西0.64mの楕円形。深さ0.46m。いずれも出土遺物はない。



第8図 SK 2～6平面・断面図(縮尺1/50)

### 溝

SD 1は調査区を東西に延び、検出長約16m、最大幅で1.00m。淡黒褐色粘質土を埋土にもち、P 28～34、P 38～39に切られ、東西両側を攪乱に切られる。諸制約により、未掘である。

小穴

SB1、SA1を構成するものの他に、P1~44の44基がある。径0.2~0.5m程の円形の平面形をもつものが大半であり、深さも約0.2mまでと浅い。19基に柱当たりが残っており、建物柱穴を構成するものと思われるが、第3~4層の削平が顕著であり、柱並びは確認できなかった。P28~34、P38~39がSD1を切る。P7がP8を切り、P9がP10を切る。P11がSA1-P5を切り、P12がSA1-P6に切られる。P32埋土から土師器瓷細片が出した。

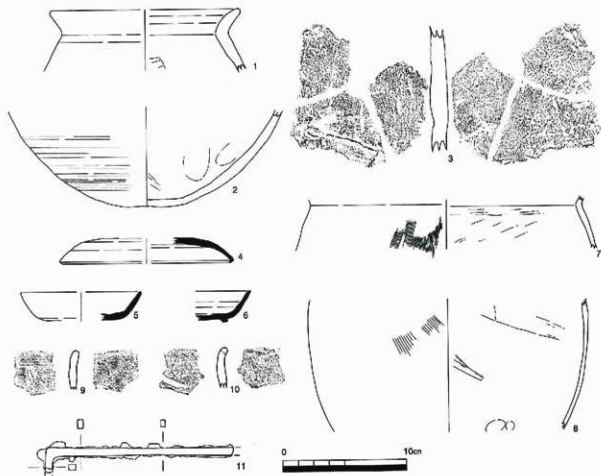
層別	基	径 (m)	深 (m)	方位	説明	構造	埋土	柱石 (径高)	埋土 (径高)	川土遺物	備考
SB1	溝北	3.58	深南	3.57	0.38	東	北	なし	なし		
5.5.1	東溝	1.74	南	0.67		西	西				
5.5.2	東溝	0.97	南	0.57	0.56	北	北	西	埋土		
5.5.3	東溝	0.29	南	0.28	0.18	北	北	西	埋土		
5.5.4	東溝	0.36	南	0.38	0.28	北	北	西	埋土		
5.5.5	東溝	0.29	南	0.38	0.12	北	北	西	埋土		
5.5.6	東溝	0.21	南	0.24	0.12	北	北	西	埋土		
5.5.7	東溝	0.25	南	0.24	0.14	北	北	西	埋土		
5.5.8	東溝	0.24	南	0.17	0.13	北	北	西	埋土		
5.5.9	東溝	0.27	南	0.17	0.05	北	北	西	埋土		
5.5.10	東溝	0.05	南	0.10		北	北	西	埋土		
5.5.11	東溝	0.30	南	0.25	0.19	北	北	西	埋土		
5.5.12	東溝	0.32	南	0.22	0.18	北	北	西	埋土		
5.5.13	東溝	0.30	南	0.24	0.19	北	北	西	埋土		
5.5.14	東溝	0.30	南	0.28	0.28	北	北	西	埋土		
5.5.15	東溝	0.31	南	0.29	0.24	北	北	西	埋土		
5.5.16	東溝	0.29	南	0.26	0.20	北	北	西	埋土		
5.5.17	東溝	0.29	南	0.24	0.19	北	北	西	埋土		
5.5.18	東溝	0.21	南	0.17	0.12	北	北	西	埋土		
5.5.19	東溝	0.21	南	0.17	0.12	北	北	西	埋土		
5.5.20	東溝	0.21	南	0.17	0.12	北	北	西	埋土		
5.5.21	東溝	0.21	南	0.17	0.12	北	北	西	埋土		
5.5.22	東溝	0.21	南	0.17	0.12	北	北	西	埋土		
5.5.23	東溝	0.21	南	0.17	0.12	北	北	西	埋土		
5.5.24	東溝	0.21	南	0.17	0.12	北	北	西	埋土		
5.5.25	東溝	0.21	南	0.17	0.12	北	北	西	埋土		
5.5.26	東溝	0.21	南	0.17	0.12	北	北	西	埋土		
5.5.27	東溝	0.21	南	0.17	0.12	北	北	西	埋土		
5.5.28	東溝	0.21	南	0.17	0.12	北	北	西	埋土		
5.5.29	東溝	0.21	南	0.17	0.12	北	北	西	埋土		
5.5.30	東溝	0.21	南	0.17	0.12	北	北	西	埋土		
5.5.31	東溝	0.21	南	0.17	0.12	北	北	西	埋土		
5.5.32	東溝	0.21	南	0.17	0.12	北	北	西	埋土		
5.5.33	東溝	0.21	南	0.17	0.12	北	北	西	埋土		
5.5.34	東溝	0.21	南	0.17	0.12	北	北	西	埋土		
5.5.35	東溝	0.21	南	0.17	0.12	北	北	西	埋土		
5.5.36	東溝	0.21	南	0.17	0.12	北	北	西	埋土		
5.5.37	東溝	0.21	南	0.17	0.12	北	北	西	埋土		
5.5.38	東溝	0.21	南	0.17	0.12	北	北	西	埋土		
5.5.39	東溝	0.21	南	0.17	0.12	北	北	西	埋土		
5.5.40	東溝	0.21	南	0.17	0.12	北	北	西	埋土		
5.5.41	東溝	0.21	南	0.17	0.12	北	北	西	埋土		
5.5.42	東溝	0.21	南	0.17	0.12	北	北	西	埋土		
5.5.43	東溝	0.21	南	0.17	0.12	北	北	西	埋土		
5.5.44	東溝	0.21	南	0.17	0.12	北	北	西	埋土		

表2 遺構一覧表

4 出土遺物

1~2は土師器。1は口縁部片。口縁部復元径20.0cm、口頸部復元径17.8cm。口縁部は厚く、短く外反し、端部を丸く収める。胴部内面にケズリを施す。細片資料に強いナデによって口縁部内面に数条から

なる凹線を残す、いわゆる段状口縁部が存在する。2は底部片。丸底。外面は強いナデを全面に施し、内面に指押さえ痕が残る。3は製塩土器と思われる個体片。器壁は厚い。外面は部分的にケズリを、内面は緩いナデを施す。胎土の特徴は極めて粗い。4は須恵器杯B蓋片。復元径17.6cm。端部を内方に強く折り返した後、鋭く収める。天井部はやや肩が張るものの扁平である。天井部外面に厚く降灰。5は杯A片。復元径12.6cm、器高3.0cm。口縁部は外方にまっすぐのびる。底部外面はヘラで二次調整する。6は杯B片。器高3.3cm。口縁部は外方にまっすぐのびる。高台は丁家に作り、さほど外に張らず、内側で接地する。7～8は土師器甕片。器壁は薄い。胴部外面にハケメ、内面にケズリを施す。7外面のハケメは極細かい。9～10は製塩土器口縁部片。口唇部が僅かに開く。9の口縁部は丁寧なナデを施す。10は強く屈曲する。11は鉄釘。基部の端をそのまま折り曲げて頭部を作成する折釘である。断面は方形を呈する。



第9図 出土遺物実測図（縮尺1/3）

番号	遺種・器名	種別	材質	寸法	出土層	出土位置	製作技法・特徴・備考	胎土・土質	色相	保存状況	備考
1	S01 陶器	土師器	土	口径17.6	11	須恵器杯B蓋片	端部を内方に強く折り返した後、鋭く収める。天井部はやや肩が張るものの扁平である。天井部外面に厚く降灰。	黄褐色	凹線	口縁部A/B 凹線付	
2	S02 陶器	土師器	土	口径12.6	11	須恵器杯A片	口縁部は外方にまっすぐのびる。底部外面はヘラで二次調整する。	黄褐色	凹線	凹線付	灰層下
3	S03 陶器	土師器	土	口径17.6	11	須恵器杯B蓋片	口縁部は外方にまっすぐのびる。高台は丁家に作り、さほど外に張らず、内側で接地する。	黄褐色	凹線	凹線付	凹線付
4	S04 陶器	土師器	土	口径17.6	11	須恵器杯B蓋片	口縁部は外方にまっすぐのびる。高台は丁家に作り、さほど外に張らず、内側で接地する。	黄褐色	凹線	凹線付	凹線付
5	S05 陶器	土師器	土	口径12.6	11	須恵器杯A片	口縁部は外方にまっすぐのびる。底部外面はヘラで二次調整する。	黄褐色	凹線	凹線付	凹線付
6	S06 陶器	土師器	土	口径17.6	11	須恵器杯B蓋片	口縁部は外方にまっすぐのびる。高台は丁家に作り、さほど外に張らず、内側で接地する。	黄褐色	凹線	凹線付	凹線付
7	S07 陶器	土師器	土	口径17.6	11	須恵器杯B蓋片	口縁部は外方にまっすぐのびる。高台は丁家に作り、さほど外に張らず、内側で接地する。	黄褐色	凹線	凹線付	凹線付
8	S08 陶器	土師器	土	口径17.6	11	須恵器杯B蓋片	口縁部は外方にまっすぐのびる。高台は丁家に作り、さほど外に張らず、内側で接地する。	黄褐色	凹線	凹線付	凹線付
9	S09 陶器	土師器	土	口径17.6	11	須恵器杯B蓋片	口縁部は外方にまっすぐのびる。高台は丁家に作り、さほど外に張らず、内側で接地する。	黄褐色	凹線	凹線付	凹線付
10	S10 陶器	土師器	土	口径17.6	11	須恵器杯B蓋片	口縁部は外方にまっすぐのびる。高台は丁家に作り、さほど外に張らず、内側で接地する。	黄褐色	凹線	凹線付	凹線付
11	S11 鉄器	鉄釘	鉄	長さ11.1	11	鉄釘	基部の端をそのまま折り曲げて頭部を作成する折釘である。断面は方形を呈する。	黄褐色	凹線	凹線付	凹線付

表3 遺物一覧表

## 5 まとめ

調査によって土井ノ上1区調査時に検出した律令期集落の西への広がりを示す遺構群を検出した。古墳時代後期には興道庵寺推定地付近の高位面を積極的に選地した遺構分布がみられたが<sup>94</sup>、興道庵寺建立を契機に強い土地規制下、低位面に集落域を展開させたものと推測される。

調査の成果として遺跡内で初めて律令期の竪穴建物に付随する造り付けカマドを検出した。カマドの概略は既述のとおりであるが、断ち割りによってカマドの構築について以下の知見を得た。1. 床面から前面を浅く、奥側を深めに掘り形を掘削するとともに第4層上面から煙道部を掘り込む。2. 掘り形最奥部に礫を芯材に粘土を叩き締めて煙出し部との接点を作り出し、さらに礫・粘土を積み上げて煙出し部を構築する。3. 掘り形の前面を整地した上で、最奥部と煙出し部との接点から前面に向かって礫を芯材として粘土を叩き締めながら両袖部を形成する。4. 掘り形前面の凹凸を貼床によって整形する。

竪穴建物SB1の構造は、明確な床面形成、壁面に沿う柱穴配置、造り付けカマドの有する点で土井ノ上1区竪穴建物SB1～2と共通する<sup>45</sup>。遺跡内での律令期の普遍的な竪穴建物構造と思われる。さらにこの中でも竪穴建物SB1は、平面規模、カマド横の土坑状施設の有無、建物覆土からの一定量の製塩土器片の出土、あるいは土器胎土の非常に粗く、復元径が小さく、器形が鍋、または砲弾状を早すると思われる製塩土器個体<sup>46</sup>の散在が認められる点で土井ノ上1区SB2と強い共通性をもつ。建物の性格については土井ノ上1区検出掘立柱建物群との機能差を考慮して改めて検討したい<sup>27</sup>。

掘立柱建物は、SB1-P3、SA1-P2の柱穴、小穴P2、P4、P10、P13～14において桁行5間×奥行2間以上の建物を構成する可能性があるが、柱穴の切り合いから竪穴建物SB1に後続すると思われる、該期の掘立柱建物は認められなかった。

## 註

<sup>21</sup> 興道庵寺跡内において過去に行われた調査を以下のとおり区分した。

土井ノ上1区	1997年調査	民間企業社屋新築工事に係る発掘調査（既報）
土井ノ上2区	2001年調査	本報告 IV
土井ノ上3区	2001年調査	美浜町水防倉庫新築工事に係る試掘調査（未報）
中ノ丁1区	2000年調査	本報告 I

<sup>22</sup> ここでいう高低高地（高位面、低位面）は、段丘面、自然堤防と後背湿地といった広義の地形区分を指すものではなく、高低差が数m内での段丘表面起伏といった伏巻の微地形区分に基づいている。

<sup>23</sup> 土井ノ上1区遺構面西側を中心に同様に砂礫が混じる段丘表層、段丘構成層の砂礫層の層相を確認している。

なお、土井ノ上1区調査報告（美浜町教育委員会1998、以下略）ではこの範囲を河道跡と報告した。ここで修正する。

<sup>24</sup> 本報告 IV 興道庵寺跡（掘ノ上1区）調査報告 5、まとめに記述。

<sup>25</sup> 土井ノ上1区調査報告では竪穴建物SB1についてカマドが存在しないものと報告したが、再度、調査図面、写真を検討することによって建物北東隅部に造り付けカマドを備えていた痕跡を確認した。

<sup>26</sup> 土井ノ上1区調査報告資料125、407、409、本報告3を指す。これらの資料について三重大学人文学部教授、山中康氏（当時、向日市歴史文化財センター）が長岡京出土資料との対比において焼塩釜である可能性を示唆された（山中1998）。

<sup>27</sup> 土井ノ上1区調査報告で貯蔵穴としたSB2床面土坑SK33について最上位の敷石の有無に構造差があるものの、埋土に多くの焼土、灰が混入しており、本報告SB1-SK1と同様の性格をもつカマドとは別の火灶と想定し、船岡式行那の礎礎に含まれない異質な製塩土器器体を焼塩釜と評価した上で竪穴建物をいわゆる調理に関わる工房と捉えた（松葉2002）。しかし、現段階でカマド、及びカマド横の土坑状遺構と製塩土器群の明確な共存関係は認められない。さらに資料の蓄積を待つ必要がある。

## 【引用・参考文献】

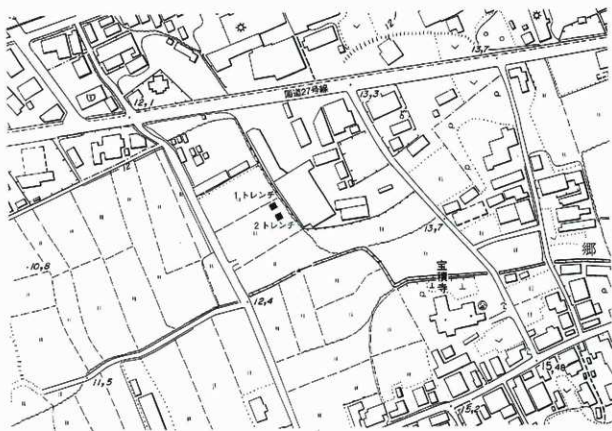
- 松本真友美 2002 「興道庵寺跡」[第17回発掘調査報告書資料] 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター  
松葉竜司・松本真友美 2002 「7. 興道庵寺跡」[福井県嶺南地方の考古学] 嶺南地方の考古学を学ぶ会  
美浜町教育委員会 1998 「興道庵寺跡」美浜町教育委員会  
山中 康 1998 「焼塩釜を食した古代都市民 ～焼塩釜の流通からみた宮都の都市性～」[年報都城9] 向日市埋蔵文化財センター



## II 藤ノ木遺跡調査報告

### 1 調査概要

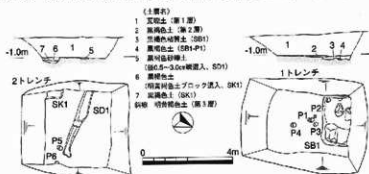
調査地は藤ノ木遺跡の西縁部に位置し、標高12m前後の耳川左岸の低位段丘面末端に立地する。古墳時代から中世までの複合遺跡であり、郷市地係をほぼ包括するように興道寺遺跡の北側に広く展開する。調査地周辺での既往の調査はない。調査に際しては調査後の地盤不等沈下による影響などを考慮して、建物建築予定地外の土地造成部分に2本のトレンチからなる40mの試掘調査区を設定した。



第10図 調査区位置図 (縮尺1/2,500)

### 2 基本層序

上層から、第1層：瓦礫土（現代の整地土）、第2層：黒褐色土、第3層：明黄褐色土（段丘表層）である。1トレンチ上層断面に僅かに残る第2層の分布、検出遺構埋土の状況からみて該地に黒色土系の遺物包含層堆積があったものと思われる。第3層は美浜町上野から興道寺にかけて広がる河岸段丘面表層から連続し、さらに北方の洪水山付近まで延びると考えられる段丘表層の粘土層である<sup>1)</sup>。



第11図 調査区平面・土層断面図 (縮尺1/200)

### 3 検出遺構

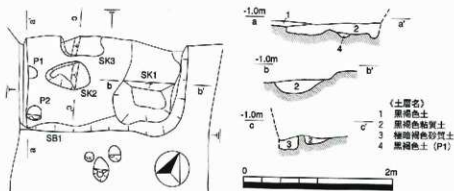
調査に際しては、第3層上面に精査の主眼をおいた。検出された遺構は、竪穴建物1棟（SB1）、土坑1基（SK1）、溝1条（SD1）、小穴6基（P1～6）である。なお、1トレンチ北西端地表面に任意レベル0mを設定し、図中の各レベルはこの任意値からのマイナス値で示した。

#### 竪穴建物

SB1は方形の平面形をもつものと思われ、建物東縁掘り形で18度西偏する。南北検出1.3m、東西検出2.17m、深さ0.14m。黒褐色粘質土を覆土にもつ。床面は比較的凹凸がはっきりとしており、貼床面、叩き締めなどの床面整形は認められない。床面に比較的近いレベルからいずれも破片で須恵器杯H蓋1点（1）、土師器甕1点（2）、2とは異個体の甕31点（点数中に同一個体を含む）、製塩土器2点（3～4）、3～4とは異個体の製塩土器100余点（点数中に同一個体を含むが図化不能）が出土した。2の土師器甕、3～4を含む製塩土器群は意

図的に破砕された状況で出土している。覆土中に被熱した粘土塊が認められた。

建物には土坑3基（SK1～3）、小穴2基（P1～2）を伴う。SK1は南北検出1.09m、東西0.76mの南北に長い崩れた方形の平面形をもつ。深さ0.19



第12図 SB1平面・断面図（縮尺1/50）

m。黒褐色粘質土を埋土にもつ。SK2は東西0.58m、南北0.36mの東西に長い崩れた楕円形。深さ0.11m。極暗褐色土を埋土にもつ。SK3は南北検出0.27m、東西0.47mの方形。深さ0.18m。黒褐色粘土を埋土にもつ。P1～2はともに径0.2m程の円形であり、黒褐色土を埋土にもつ。いずれも遺物の出土はない。

#### 土坑

SK1は南北検出0.83m、東西検出0.42m、深さ0.25m。埋土から須恵器甕1点、土師器甕2点（5）、製塩土器1点が破片で出土した。

#### 溝

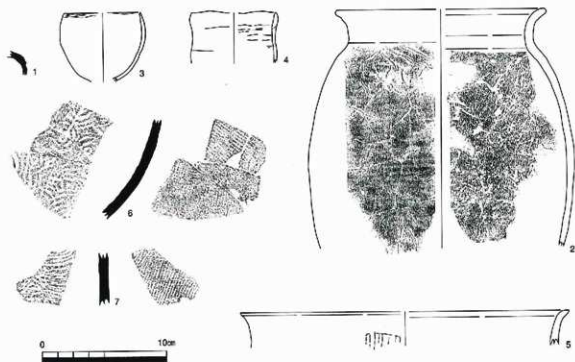
SD1は東西検出3.1m、南北0.48mの南北に延びる細長いプランをもつ。深さ0.06mと極めて浅く、3cmまでの砂礫で構成される黒褐色砂礫土を埋土にもつ。埋土から須恵器甕3点（6～7）、土師器甕2点、製塩土器1点が破片で出土した。いずれも摩滅が著しい。

#### 小穴

いずれも円形の平面形。P1～4は径0.2m、深さ0.1m前後に取まる。

発見地	形 状 (cm)				下部 形状	施 装 様 式	出土層 (層名)	出土遺物	備 考
	全 長	口 径	底 径	高					
5561	甕土	1.30	0.90	0.17	0.14	丸	丸	須恵器	須恵器
5562	甕土	0.99	0.76	0.19	0.19	2b	丸	須恵器	須恵器
5563	甕土	0.94	0.76	0.11	0.11	b	丸	須恵器	須恵器
5564	甕土	0.47	0.37	0.18	0.18	4b	丸	須恵器	須恵器
5565	甕土	0.18	0.13	0.06	0.06	4a	丸	須恵器	須恵器
5566	甕土	0.30	0.18	0.11	0.11	4a	丸	須恵器	須恵器
5567	甕土	0.33	0.23	0.27	0.27	4b	丸	須恵器	須恵器
5568	甕土	3.10	0.48	0.56	0.56	5	丸	須恵器	須恵器
5569	甕土	0.33	0.30	0.30	0.30	1b	丸	須恵器	須恵器
5570	甕土	0.12	0.12	0.09	0.09	1b	丸	須恵器	須恵器
5571	甕土	0.31	0.18	0.09	0.09	1a	丸	須恵器	須恵器
5572	甕土	0.24	0.22	0.11	0.11	1a	丸	須恵器	須恵器
5573	甕土	0.26	0.19	0.22	0.22	1a	丸	須恵器	須恵器
5574	甕土	0.17	0.17	0.17	0.17	1a	丸	須恵器	須恵器

表4 遺構一覧表



第13回 出土遺物実測図 (縮尺1/3)

#### 4 出土遺物

1は須恵器杯日蓋片。肩部に鋭い稜をもつ。外面は肩部近くまで回転ヘラ削りを施す。2は土師器甕。口縁部復元径22.0cm、口頸部復元径19.6cm。胴部最大復元径28.2cm。口縁部は丸みをもって強く外反する。胴部はさほど張らず、緩やかな丸みを帯びて下半に至る。外面はやや粗いハケメを全体に施した後、上半に左下に向けたやや粗いハケメを、下半に真下に向けたやや粗いハケメを施す。内面は基本的に左下に向けた幅の広いケズリを施す。3～4は器壁が4～5mmと極めて薄手の製塩土器口縁部片。3は復元径8.0cm、残高7.3cm。碗状の器形を呈し、口縁部は内傾し、端部を鋭く取める。器壁は4mm程と極めて薄い。内外面に丁寧なナデが施される。4は復元径8.9cm。口縁部は外販気味に開きながらまっすぐのび、端部を鋭く取める。内外面に丁寧なナデを施す。5は土師器甕口縁部片。復元径35.0cm。口縁部はまっすぐのび、端部を外方につまみ出して鋭く取める。外面には粗いハケメを施す。6～7は須恵器甕胴部片。6は器壁がやや厚く、外面に平行文叩き、内面に円弧叩きが残る。摩滅が著しい。7は外面に平行文叩きがみられるが、さらに部分的にカキメを施す。内面は円弧叩き。

番号	遺跡・施設	種類	石室	法基 (cm)		関係施設・資料・本文	崩止・構造	気調	墳墓等	備考
				石室	法基					
1	SD1 竪石	須恵系	須恵系	—	—	関内遺跡(平野遺跡)	中年代(須恵)	無	無	
2	SD1 竪石	土師系	須恵系	122.00	—	関内遺跡(平野遺跡)	関内(須恵)	無	無	
3	SD1 竪石	須恵系	須恵系	122.00	—	関内遺跡(平野遺跡)	関内(須恵)	無	無	
4	SD1 竪石	須恵系	須恵系	122.00	—	関内遺跡(平野遺跡)	関内(須恵)	無	無	
5	SK1 竪石	土師系	須恵系	122.00	—	関内遺跡(平野遺跡)	関内(須恵)	無	無	
6	SD1 竪石	須恵系	須恵系	—	—	関内遺跡(平野遺跡)	関内(須恵)	無	無	
7	SD1 竪石	須恵系	須恵系	—	—	関内遺跡(平野遺跡)	関内(須恵)	無	無	

表5 遺物一覧表

## 5 まとめ

調査によって古墳時代後期の竪穴建物1棟(SB1)、溝1条(SD1)と律令期の土坑1基(SK1)などの遺構を検出した。

竪穴建物SB1は覆土中の須恵器杯H蓋1がMT15~TK10型式併行期であり、製埴土器3~4が浜柳ⅡB式前半期の特徴をもつことから、6世紀前半の時期と捉えられる。

遺跡は、獅子塚古墳に近接して立地しており、时期的にも大きな隔たりがないことから、獅子塚古墳被葬者層に母集団を求め、6世紀後半にみる興道寺遺跡の前身集落として想定しておきたい。

### 註

※1 鳥居直也氏の考察による(鳥居2002)。

### [引用・参考文献]

鳥居直也 2002 「第2章 遺跡の立地と周辺の環境 第1節 周辺の地理的環境」  
『興道寺古墳群 一泉管中山間地域総合整備事業美方地区に伴う発掘調査報告書一』美浜町教育委員会

### III 竜沢寺遺跡調査報告

#### 1 調査概要

調査地は竜沢寺遺跡南西縁部に位置し、標高16.2m前後の中位段丘上に立地する。遺跡は弥生時代から中世までの複合遺跡であり、段丘面の南側に広く展開する。周辺では段丘面西縁辺部において美浜町教育委員会による試掘調査が数度実施されており、弥生時代後期から古墳時代初頭までの遺物包含層、竪穴住居址などが出されている。竜沢寺遺跡の北側には口背湖遺跡が展開し、1977年の美浜町教育委員会・若狭考古学研究会による発掘調査によって竪穴住居址が検出される（入江1986）。段丘面西側中央付近を開析する谷状地形を境として弥生時代後期から古墳時代初頭にかけての竜沢寺遺跡、口背湖遺跡からなる大規模集落が展開したものと推測される。

本調査に先立って4本のトレンチによる試掘調査を2001年6月4日～6日に実施した。段丘表層である褐色土を遺構面にもち、土師器甕形土器片、壺形土器片などを伴う土坑、小穴を検出した。このことから遺跡南西限の遺跡の様相確認を考慮して事業計画地内の現状保存が適わない

303㎡について発掘調査の対象とした。



第14図 調査区位置図（縮尺1/2,500）

#### 2 基本層序

上層から、第1層：極暗褐色土（耕作土）、第2層：褐色土（段丘表層）である。第2層上面は標高16.1～16.2m前後に位置し、調査区の東側から西側に向かって微かな傾斜をもっている。第1層中から土師器片数十点（4）、磨石片（5）を採集した。

#### 3 検出遺構

調査に際しては、第2層上面に精査の主眼をおいた。検出された遺構は、土坑16基、小穴36基である。第2層上面に近現代の耕作擾乱が及んでいることを考慮して第2層上面をやや深めに精査し、遺構検出に努めたが、検出遺構の平面形は不明瞭であった。

### 土坑

SK1、SK4は根痕を残す。SK10は根痕を残す。SK10底面からは炭化材が出土。SK11は遺構中央部を意図的に掘り残し、周囲を掘り込むことで小マウンド状に造る。土師器壺形土器片(1)はSK12埴土、土師器ミニチュア土器片(2)はSK13埴土から出土した。

### 小穴

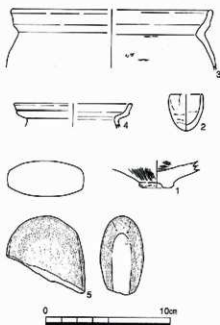
P3・9・16は根痕を残している。建物、柵列などの遺構構成はみられない。土師器壺形土器片(3)はP36埋土から出土。

坑名	埋土 (m)				土質	遺構	遺構 出土	中心位置 (埋土)	中心位置 (埋土)	出土 遺物	備考	
	長さ	幅	深さ	傾斜								
SK1	東西	0.76	南北	0.68	0.34	埴土	根痕残す	54.14	15.82	土師器壺形土器片(1)		
SK2	南北	0.72	東西	0.58	0.64	1.76	埴土	埴土	55.15	16.11		
SK3	南北	41.61	東西	0.63	0.77	1.3	埴土	埴土	55.19	15.90		
SK4	南北	0.65	東西	0.63	0.77	1.3	埴土	埴土	55.17	15.90		
SK5	南北	1.16	東西	0.83	0.72	1.3	埴土	埴土	56.17	15.90		
SK6	南北	1.03	東西	0.83	0.72	1.3	埴土	埴土	56.19	16.00		
SK7	南北	0.98	東西	0.83	0.72	1.3	埴土	埴土	56.17	15.97		
SK8	南北	0.81	東西	0.88	0.70	1.3	埴土	埴土	56.11	15.91		
SK9	南北	1.30	東西	0.88	0.77	1.3	埴土	埴土	56.11	15.94	土師器壺形土器片(1)	
SK10	南北	1.15	東西	0.85	0.69	1.3	埴土	埴土	56.12	16.03	土師器壺形土器片(1)、土師器壺形土器片(2)	
SK11	南北	1.31	東西	1.45	0.70	1.3	埴土	埴土	56.17	15.97	土師器壺形土器片(1)	
SK12	南北	0.83	東西	0.55	0.12	0.3	埴土	埴土	56.10	15.98	土師器壺形土器片(1)、土師器壺形土器片(2)	
SK13	南北	0.16	東西	1.11	0.69	0.3	埴土	埴土	56.10	16.01	土師器壺形土器片(1)	
SK14	南北	0.77	東西	0.55	0.11	0.3	埴土	埴土	56.08	15.97	土師器壺形土器片(1)	
SK15	南北	0.68	東西	0.55	0.05	0.15	埴土	埴土	56.10	16.01		
SK16		1.35			0.20	1.3	埴土	埴土	56.00	15.82		
P1	東西	0.35	南北	0.72	0.08	1.5	埴土	埴土	56.14	15.96		
P2	東西	0.34	南北	0.30	0.08	1.5	埴土	埴土	56.13	16.00		
P3	南北	0.42	東西	0.62	0.09	1.3	埴土	埴土	56.09	16.00		根痕
P4	南北	0.40	東西	0.38	0.18	1.3	埴土	埴土	56.13	15.96		
P5	南北	0.25	東西	0.32	0.13	1.3	埴土	埴土	56.22	15.55		
P6	南北	0.23	東西	0.32	0.13	1.3	埴土	埴土	56.15	16.02		
P7	南北	0.30	東西	0.24	0.14	1.3	埴土	埴土	56.12	15.98		
P8	南北	0.28	東西	0.28	0.13	1.3	埴土	埴土	56.14	16.02		
P9	南北	0.48	東西	0.44	0.25	1.3	埴土	埴土	56.17	15.79		根痕
P10	南北	0.44	東西	0.40	0.13	1.3	埴土	埴土	56.14	16.01		
P11	南北	0.49	東西	0.33	0.27	1.3	埴土	埴土	56.13	15.66		
P12	南北	0.44	東西	0.34	0.12	1.3	埴土	埴土	56.10	15.98		
P13	南北	0.32	東西	0.30	0.26	1.3	埴土	埴土	56.14	16.10		
P14	南北	0.43	東西	0.35	0.26	1.3	埴土	埴土	56.12	16.06		
P15	南北	0.30	東西	0.30	0.15	1.3	埴土	埴土	56.11	15.96		
P16	南北	0.54	東西	0.51	0.19	1.3	埴土	埴土	56.10	16.12		根痕
P17	南北	0.20	東西	0.16	0.30	1.3	埴土	埴土	56.09	16.13		
P18	東西	0.80	南北	0.80	0.18	1.3	埴土	埴土	56.10	15.52	土師器壺形土器片(1)	
P19	東西	0.56	南北	0.30	0.10	1.3	埴土	埴土	56.10	16.04	土師器壺形土器片(1)	
P20	東西	0.26	南北	0.20	0.13	1.3	埴土	埴土	56.12	16.00	土師器壺形土器片(1)	
P21	東西	0.41	南北	0.23	0.04	1.3	埴土	埴土	56.10	16.05		
P22	南北	0.44	東西	0.27	0.04	1.3	埴土	埴土	56.12	16.05		
P23	南北	0.30	東西	0.30	0.13	1.3	埴土	埴土	56.12	15.90		
P24	南北	0.22	東西	0.21	0.18	1.3	埴土	埴土	56.12	16.03		
P25	南北	0.24	東西	0.24	0.07	1.3	埴土	埴土	56.09	16.02		
P26	南北	0.52	東西	0.43	0.54	1.3	埴土	埴土	56.10	15.56	土師器壺形土器片(1)	
P27	東西	0.58	南北	0.31	0.32	1.3	埴土	埴土	56.08	15.86	土師器壺形土器片(1)	
P28	東西	0.69	南北	0.27	0.07	1.3	埴土	埴土	56.10	15.52	土師器壺形土器片(1)	
P29	東西	0.42	南北	0.40	0.06	1.3	埴土	埴土	56.10	15.52	土師器壺形土器片(1)	
P30	東西	0.83	南北	0.32	0.07	1.3	埴土	埴土	56.10	15.04		下層に埋る
P31	東西	0.28	南北	0.34	0.12	1.3	埴土	埴土	56.13	16.03		
P32	東西	0.16	南北	0.17	0.20	1.3	埴土	埴土	56.13	15.60		
P33	東西	0.22	南北	0.22	0.12	1.3	埴土	埴土	56.10	15.98		
P34	東西	0.28	南北	0.27	0.08	1.3	埴土	埴土	56.10	16.02		
P35	東西	0.13	南北	0.18	0.29	1.3	埴土	埴土	56.04	15.96		
P36	東西	0.90	南北	0.56	0.30	1.3	埴土	埴土	56.05	15.93	土師器壺形土器片(1)	

表6 遺構一覧表

### 4 出土遺物

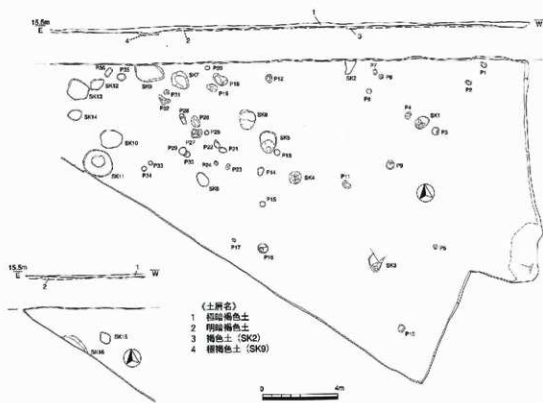
1は土師器壺形土器底部片。平底の底部から一端上に立ち上がり、さらに斜めに開く。底部内外面に極細かいハケメを施す。2は土師器ミニチュア土器片。復元径2.5cm、器高2.9cm。手捏ねで作り、尖底気味の底部からそのまま立ち上がり、端部を鋭く収める。外面に指押さえ痕が残る。3~4は土師器壺形土器口縁部片。3は復元径15.8cm。口縁部は強く屈曲し、さらにやや開きながら立ち上がる。外面の強い強いナデによって端部が肥厚する。4は復元径9.4cm。口縁部が強く屈曲した後、立ち上がり、端部は丸く収め、外方へつまみ出す。外面に1条の凹線を施す。5は磨石片。花崗岩円礫。周縁、及び表面の片面の一部に使用痕が残る。側縁部はかなり使い込まれており、明瞭な磨面をもつ。磨面幅2.4cm。表面の片面に部分的な磨痕が残る。端部には敲打痕が残る。



第15図 出土遺物実測図 (縮尺1/3)

序号	名称・層位	種類	数量	調査 (cm)		発見経緯・調査方法	出土・検出	発掘場所	備考
				口径	深さ				
1	段丘1層土	遺物	古銅土器	-	-	発掘調査(遺物調査)P1-P2	小中籠(石高・笠形多)	段丘1層	
2	段丘1層土	遺物	土器	42.5	2.9	手掘り	小中籠(石高・笠形多)	段丘1層	
3	段丘2層土	遺物	土器	43.5	-	口部形跡(土器)	小中籠(石高・笠形多)	段丘2層	
4	段1層	遺物	土器	45.4	-	口部形跡(土器)	小中籠(石高・笠形多)	段1層	
5	段1層	遺物	土器	-	-	口部形跡(土器)	小中籠(石高・笠形多)	段1層	

表7 遺物一覧表



第16図 調査区平面・土層断面図 (縮尺1/200)

## 5 まとめ

調査によって明確に遺物を構成する遺構は検出されなかった。根柢をもつ土坑、小穴の存在は近代以降の調査地の現況であった桑畑の名残を示すものであり、検出遺構の大半が近現代の開墾などに伴うものと考えられる。段丘面縁部という調査地の立地条件と合わせると遺構の大半が既に削平によって失われているものと判断される。弥生時代後期から古墳時代初頭までの遺物が若干出土したものの、丹後系の変形土器3、近江系の受口状口縁甕の影響を受け、在地化したような変形土器4などが断片的に存在する程度であり、土器様相の実態は不明である。

### [引用・参考文献]

- 入江文敏 1986 「口背岡遺跡」『福井県史資料編13 考古本文編』福井県  
 入江文敏 1987 「弥生時代後期から古墳時代前期への土器の展開 —湖北地方とその周辺— 若狭地方の場合」  
 『滋賀県埋蔵文化財センター紀要 昭和63年度』滋賀県埋蔵文化財センター  
 坪田聡子 2000 「若狭・越前における丹後系土器の様相」  
 『庄内式土器研究XⅡ 丹波・丹後・但馬を中心とした庄内式併行期の土器の移動』庄内式土器研究会  
 山口 充 1984 「美浜町内出土の後期弥生式土器と土師器」『福井県考古学会々誌第2号』福井県考古学会

## IV 興道寺遺跡（土井ノ上2区）調査報告

### 1 調査概要

調査地は興道寺遺跡の北東縁部に位置し、標高約20mの耳川左岸の低位段丘面に立地する。土井ノ上2区調査は盛土工事に伴う試掘調査であり、調査地は土井ノ上1区の南隣、中ノ丁1区調査地から町道金安線を挟んだ東隣の水田である。調査に際して盛土予定域の北縁に1本のトレンチ、計56㎡からなる試掘調査区を設定した。



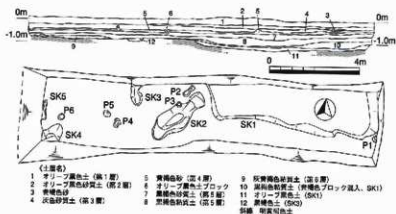
第17図 調査区位置図 (縮尺1/2,500)

### 2 基本層序

上層から、第1層：オリブ黒色土（耕作土）、第2層：オリブ黒色砂質土（耕作床土）、第3層：灰色砂質土（旧耕作土）、第4層：黄褐色砂（旧耕作床土）、第5層：黒褐色砂質土～粘質土（遺物包含層）、第6層：灰黄褐色粘質土（旧表土）、第7層：明黄褐色土（段丘表層）である。該地における段丘表層上の標準的な土層断面を示している。第1層において須恵器杯H蓋1点、土師器甕1点、第5層において須恵器杯H1点、杯A2点、杯B2点、甕1点、平瓦1点、土師器甕3点、鍋1点、皿1点、製塩土器4点の破片を採集した。

### 3 検出遺構

調査に際しては、第7層上面に精査の主眼をおいた。検出された遺構は、土坑5基（SK1～5）、小穴6基（P1～6）である。なお、トレンチ北東端の地表面に任意レベル0mを設定し、図中の各レベルはこの任意値からのマイナス値で示した。



第18図 調査区平面・土層断面図 (縮尺1/100)

#### 土坑

SK1は南北検出2.08m、東西7.50mの崩れた方形の平面形である。深さ0.30m。底面の凹凸が激しい。堀土から須恵器甕1点(1)、不明1点、土師器甕22点(2)、製塩土器13点、鉄釘1点がいずれも小片で出土。SK2は北東-南西検出2.88m、北西-南東1.07mの崩れた楕円形。深さ0.40m。P3を切る。オリブ黒色土、黒色土を掘土にもち、須恵器杯B1点(3)、外面に緻密なヘラ磨きを施す土師器杯A2点の小片で出土する。SK5堀土から土師器甕片1点が出土。



## 小穴

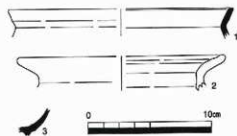
いずれも円形の平面形をもち、径0.3m前後、深さ0.1～0.2mに収まる。P2埋土から土師器壺片1点が出土。

区画	位置 (m)		経緯	経緯	遺構	遺構	遺構	地層	地層	出土	出土	備考
	東	北										
S-1	0.00	0.00	0.20	7° 30'	溝	溝	溝	溝	溝	溝	溝	
S-2	0.00	0.00	0.20	7° 30'	溝	溝	溝	溝	溝	溝	溝	
S-3	0.00	0.00	0.20	7° 30'	溝	溝	溝	溝	溝	溝	溝	
S-4	0.00	0.00	0.20	7° 30'	溝	溝	溝	溝	溝	溝	溝	
S-5	0.00	0.00	0.20	7° 30'	溝	溝	溝	溝	溝	溝	溝	
P-1	0.00	0.00	0.20	7° 30'	溝	溝	溝	溝	溝	溝	溝	
P-2	0.00	0.00	0.20	7° 30'	溝	溝	溝	溝	溝	溝	溝	
P-3	0.00	0.00	0.20	7° 30'	溝	溝	溝	溝	溝	溝	溝	
P-4	0.00	0.00	0.20	7° 30'	溝	溝	溝	溝	溝	溝	溝	
P-5	0.00	0.00	0.20	7° 30'	溝	溝	溝	溝	溝	溝	溝	
P-6	0.00	0.00	0.20	7° 30'	溝	溝	溝	溝	溝	溝	溝	

表8 遺構一覧表

## 4 出土遺物

1は須恵器壺口縁部片。口縁部復元径23.8cm、頸部復元径22.4cm。口縁部は強く屈曲し、外上方へ短くまっすくのびる。端部は面をなす。口縁部外面がやや肥厚。外面に強いナデを施す。2は土師器壺口縁部片。口縁部復元径21.8cm、頸部復元径17.4cm。口縁部は大きく開きながら外方へのびる。端部は面をなす。内面に強いナデによる三条の浅い凹面をもつ。3は須恵器杯B底部片。高台は外側で接地する。体部は丸みを帯びる。



第19図 出土遺物実測図 (縮尺1/3)

品名	数量	形状	材質	用途	寸法 (cm)		製作地	器型	出土	層位	発掘	調査
					長さ	径						
1	1	壺口縁部片	須恵器	口縁部	23.8	22.4	不明	壺	不明	不明	不明	不明
2	1	土師器壺口縁部片	土師器	口縁部	21.8	17.4	不明	壺	不明	不明	不明	不明
3	1	須恵器杯B底部片	須恵器	底部	不明	不明	不明	杯	不明	不明	不明	不明

表9 遺物一覧表

## 5 まとめ

調査によって土井ノ上1区調査地で検出された律令期集落の南側への広がり的一端を検出した。土坑SK1は歪な方形プランをもち、底面の凹凸が著しく、明確に床面構築、建物柱穴をもたない点で土井ノ上1区SB3～4と共通している。該期の竪穴遺物の一形態であると思われるが、調査の蓄積を待って検討したい。

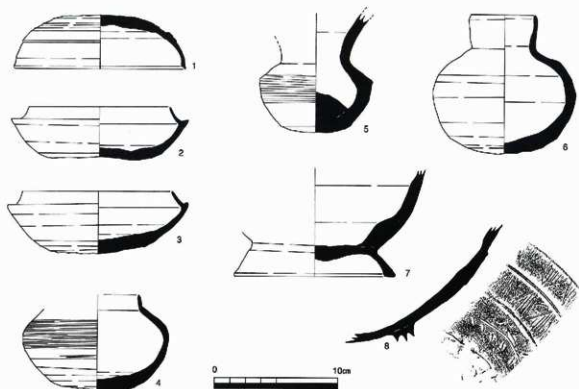
### [引用・参考文献]

茨城県教育委員会 1998 『興道寺遺跡』

## V 興道寺古墳群（中町2区）調査報告

### 1 調査概要

調査地は興道寺古墳群の北東縁部に位置し、標高19.8mの耳川左岸の低位段丘面に立地する。数基の石室墳が地表面に顕在し、「塚原」「御前塚」「狐塚」などの古墳立地を伺わせる小字が残るなど、古くより古墳群の存在が認識されてきた。昭和5年頃に古墳群近辺から出土したと墨書きが残る須恵器8点を美浜町教育委員会が保管している。須恵器杯H蓋1点（1）、杯H2点（2～3）、短頸壺1点（4）、広口壺1点（5）、直口壺1点（6）、脚付壺1点（7）、器台1点（8）である。1は口径13.7cm、器高4.4cm、口縁部高2.3cm。肩部に明瞭な稜をもつ。口縁部は丸みを帯びてやや外方に張り出し、端部を外へつまみ出す。天井部は強い丸みを帯び、器高は高い。外面に丁寧な回転ヘラ削りを施す。2は口径11.3cm、器高4.2cm、受部径14.2cm、口縁部高1.1cm。3は口径11.8cm、器高5.0cm、受部径14.3cm、口縁部高1.0cm。2～3は丸みを帯びた体部から短く内傾する薄い口縁部をもち、端部を鋭く収める。底部外面に回転ヘラ削りを施す。2は極めて精巧。3外面に降灰。4は復元径6.6cm。4～5は体部外面上半に細かいカキメを、下半に回転ヘラ削りを施す。6は口径4.8cm、器高11.2cm。体部外面のヘラ削りは粗雑。7は脚部径11.8cm。短脚であり、外下方にのびて、接地面を面取りする。8の体部外面は3条の凸線によって二区に分け、頂点を接するように鋸歯状文様を配し、その下位は細かいカキメを施した後、上下二段の列点文を施す。底部外面には叩き痕が薄く残る。いずれも6世紀代の所産。



第20図 伝古墳群出土須恵器実測図



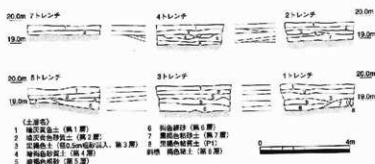
第21図 調査区位置図 (縮尺1/2,500)

中町2区調査は土地造成、建物建設に伴う試掘調査であり、調査地は中町1区調査地<sup>1)</sup>の約35m北方の水田である。中町1区で検出した埋没墳の北への広がりを考慮して、工事予定地をほぼ覆うように7本のトレンチからなる計87㎡の試掘調査区を設定した。

## 2 基本層序

調査地全体の基本層序は上層から、第1層：暗灰黄色土（耕作土）、第2層：暗灰黄色砂質土（耕作床土）、第3層：黒褐色土（径～5cmの砂礫混入、遺物包含層）、第4層：暗褐色砂質土（径～5cmの砂礫混入、自然流路堆積土）、第5層：暗褐色粗砂（自然流路堆積土）、第6層：褐色細砂（自然流路堆積土）、第7層：黒褐色粘砂土（旧表土）、第8層：褐色粘土（段丘表層）である。2トレンチ第3層中から土師器壺片1点を採集した。

調査区北側、南側それぞれの各トレンチ東西方向の土層堆積を第27図に示す。北側では標高18.8～19.1m付近に段丘表層の第8層上面が位置し、その上層に旧表土層の第7層が最高位で標高19.3mまで分布する。3トレンチ付近では旧表土層の第7層が最高位で標高18.6mまで開析され、自然流路堆積土層である第5～6層が厚く堆積する。



第22図 調査区土層断面図 (縮尺1/200)

調査区全面を覆うように第3層が標高18.9～19.4mに水平に分布する。調査区南側では2～4トレンチ付近、標高18.8～18.9m付近に第8層上面が位置し、段丘表層が現地地形同様に北側に向かって緩やかに低下していることを示している。第7層上面が標高19.2mに分布するが、4トレンチではこの旧表土面を標高18.8mまで開析して、第4～6層が厚く堆積する。2トレンチ付近では調査区北側同様、旧表土層、自然流路堆積土を覆って第3層が分布するが、4トレンチ付近では大半が耕作によって削平されている。

### 3 検出遺構

検出された遺構は1トレンチ南壁第3層上面から掘り込まれた小穴1基（P1）である。

#### 小穴

P1は検出幅0.15m、深さ0.30m。黒褐色粘質土を埋土にもつ。

### 4 まとめ

古墳群に伴う遺構、遺物は検出されなかった。興道寺古墳群の北限を示している。

中町1区調査地では3～4トレンチをつなぐラインの南延長上に旧表土面を開析して厚く砂、砂質土が堆積する自然流路が検出されており<sup>※2</sup>、これに沿う南北方向の低位面<sup>※3</sup>が存在する。1・5トレンチ南壁において旧表土層の上面がこの流路に向けて低下する様相を確認できることから、調査地における低位面の東西幅は約35mに復元できる。また、7トレンチでは耕作土下の標高19.3m付近に第8層下に分布すると思われる段丘構成層の砂礫層の露頭がみられることから、段丘表層が南東に向けて急激に上昇し、さらに調査区外の南東側に舌状の高位面が展開するものと考えられる。なお、トレンチ断面で検出した小穴は自然流路西側すぐに位置しており、中町1区検出の横列SA1<sup>※4</sup>に連続するものなら、13世紀後半の段階に該地段丘上を北進する自然流路左岸に沿った横列が展開したものと推測される。

#### 註

<sup>※1</sup> 興道寺古墳群内において過去に行われた調査を以下のとおり区分した。

中町1区 2000年調査 農道拡幅工事に係る発掘調査（既報）

中町2区 2002年調査 本報告V

<sup>※2</sup> 旧河道として既報告（美浜町教育委員会2002）。自然流路としてここで統一する。

<sup>※3</sup> 本報告 1、註2を参照。

<sup>※4</sup> 自然流路に沿って展開すると思われる柱列をSA1として既報告（美浜町教育委員会2002）。

#### [引用・参考文献]

美浜町教育委員会 2002 「興道寺古墳群 一京宮中山岡地域総合整備事業 美方地区に伴う発掘調査報告書一」

## VI 早瀬遺跡調査報告

### 1 調査概要

調査地は海拔約5.0～6.5mの海岸段丘面、海拔約13.0mの山裾開懸面に立地する。遺跡は早瀬集落背後の海岸段丘面上にあり、眼下には1662年の寛文地震に伴う土地隆起によって離水し、漁村集落として発達した早瀬集落が広がり、背後には縄文海進期の波浪侵食によって形成された段丘崖、及び近現代の開墾に伴う山裾開懸面が展開する。



写真2 海岸断丘崖

遺跡は、1998年に美浜町教育委員会が実施した遺跡分布調査における海岸段丘面の密な製塩土器片散布の発見によって早瀬遺跡として周知の措置が取られたが、今日、猿などが遺跡内の畑地作物を荒らす被害が増加し、休耕の後、笹藪となる状況がみられるなど、早急に遺跡の内容確認を行う必要が生じた。

このことから、海岸段丘面の製塩土器片が特に密に散在する造成地に1トレンチ（東西約5m×南北約



第23図 調査区位置図（縮尺1/2,500）

2 m)、1トレンチからやや南西、製塩土器片が一定量散在する畑地に2トレンチ(東西約3 m×南北約1 m、進展に伴って2 m拡張)を設定、さらに遺跡の西縁辺部の様相を確認するために最高位開墾面に3・4トレンチ(東西約5 m×南北約1 m)を設定した。全体の試掘調査面積は24m<sup>2</sup>。

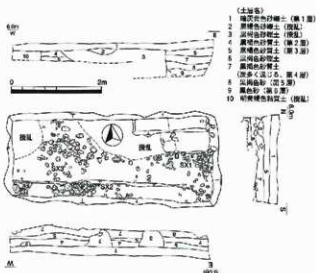
## 2 基本層序

各トレンチにおける基本層序は以下のとおりである。

### 1 トレンチ

上層から、第1層：暗灰黄色砂礫土(造成土)、第2層：黒褐色砂質土(近世堆積土)、第3層：黒褐色砂質土(製塩土器片を伴う遺物包含層)、第4層：黒褐色砂質土(古墳時代堆積土)、第5層：黒褐色砂(段丘表層)、第6層：黒色砂(段丘構成層)である。第2～3層中から土師器壺片1点、製塩土器片101点、越前焼壺片1点を採集し、トレンチ北東端の第4～5層中より土師器壺形土器片3点、壺形土器片4点、非常に薄手の製塩土器片5点、やや厚手の製塩土器片74点を採集した。

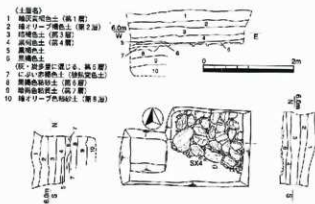
第2層以下は東から西に向けて高度を減じる元の海岸段丘面の旧地形を反映した上層堆積が認められるが、トレンチ東側では第2層が既に削平されており、トレンチ内の至るところに現代の攪乱が及ぶなど、後世の土地改変が著しい。攪乱土中から須恵器杯H蓋1点、杯B蓋1点、製塩土器21点、製塩土器支脚2点、越前焼壺1点をそれぞれ小片で採集した。第6層以下は無遺物層となる。



第24図 1トレンチ平面・土層断面図(縮尺1/100)

### 2 トレンチ

上層から、第1層：暗灰黄褐色土(耕作土)、第2層：暗オリーブ褐色土(耕作床土)、第3層：黒褐色土(旧耕作土)、第4層：黒褐色土(径2～5 mの礫混入、旧耕作床土)、第5層：黒褐色土(灰・炭が多量に混入、律令期堆積土)、第6層：黒褐色粘砂土(律令期整地土)、第7層：暗褐色粘質土(古墳時代堆積土)、第8層：暗オリーブ色粘砂土(段丘表層)となる。第1～4層からコンテナ1箱程の近世陶磁器、灯明皿、瓦などの破片とともに製塩土器片2点を採集し、第7層(海拔5.3～5.5 m)から波状文をもつ須恵器壺口縁部片1点、製塩土器片51点を採集した。第6層上面の一部が恒常的な被熱によって赤変する。



第25図 2トレンチ平面・土層断面図(縮尺1/100)

### 3・4 トレンチ

上層から、第1層：灰黄褐色土、あるいはオリーブ褐色土(現耕作土)、第2層：褐色土、あるいはよ

い黄褐色砂礫土(岩盤層)となる。

### 3 検出遺構

1 トレンチでは第1～2層を重機で除去した段階で、トレンチ西端の第3層上面に多量の製塩土器片を伴う敷石帯の一部が露頭したため、第3層、及び第4層上面に精査の主眼をおいた。トレンチ西側の第5層上面で石敷炉1基(SX1)、東側の第4層相当面上面で石敷炉1基(SX3)を検出し、さらにトレンチ南縁、北東隅の断ち割りによってトレンチ南縁の第5層相当面上面で部分的に石敷炉1基(SX2)を検出した。石敷炉としての判断の根拠は、多量の製塩土器が共伴し、いずれも限定された範囲に比較的水平面をもつ石敷きの造作が認められ、礫の赤変、剥離が認められたことによる。なお、トレンチ南西隅の第5層上面における集石帯はSX3に含めていない。

2 トレンチでは第1層を重機で除去した後、第4層まで人力で順次除去。第5層中に灰、炭の堆積を検出したため、第6層上面に精査の主眼をおいた。トレンチ西側の第6層上面で敷石遺構1基(SX4)を検出した。第6層以下の土層堆積を確認するためにトレンチ西側で下層を断ち割った。第7層中の遺物は摩滅が著しく、2次堆積に伴うものと考えられる。遺構は認められなかった。

3～4 トレンチは遺構、遺物ともに確認されなかった。



写真3 作業風景

#### 石敷炉(敷石遺構)

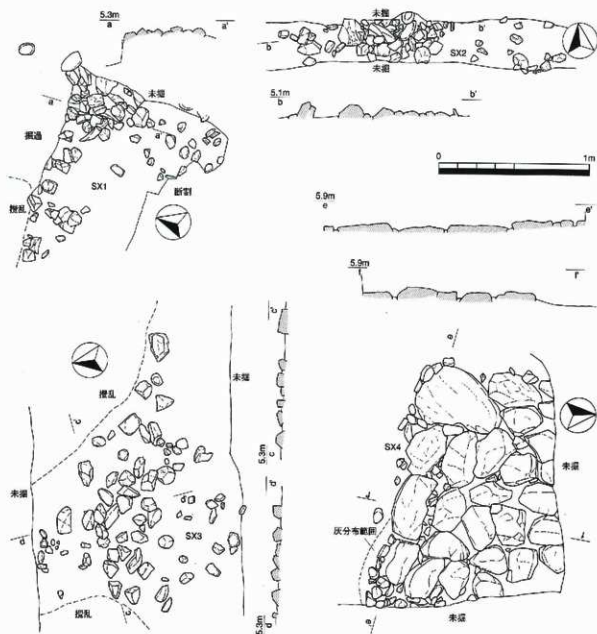
SX1は南北約1.5m×東西約1.2mの範囲に敷石が認められる。元規模、元形態は不明。大ぶりの礫を敷き並べ、その上位に小粒な礫を密に1～2段に積み重ねる範囲がある。周辺に向かって敷石の密度が徐々に薄くなり、敷石の範囲自体が不明瞭となる。敷石上端は水平性に乏しい。上端レベルは標高5.2～5.3m。礫の大きさは5～20cmと不揃いであり、角礫が大半を占め、若干円礫が含まれる。石種はチャート、緑色岩が主体。遺構北側の大半は重機掘削段階で誤って欠損してしまった。この欠損部分で敷石下層の土層断面を確認したところ、第5層砂礫上面に直接礫を敷き並べている様相を確認した。SX1に伴って土師器甕形土器片1点、壺形土器片1点、製塩土器片300点(1～7)、製塩土器支脚片1点が出土した。

SX2はSX1の東側で部分的に検出。SX1と同一炉を形成する可能性もあるが、SX2上位層面にSX3が検出されたことから断ち割りによる全体的な範囲の確認が行えず、SX1と分けて報告した。石敷炉の敷石形態、礫の大きさ、石種はSX1と共通する。敷石の上端レベルは標高5.0m。SX2に伴って土師器甕形片1点、製塩土器片169点(8～10)が出土した。

SX3はSX2の上位層面に位置する。約1.2m四方の範囲に敷石を確認したが、周辺は第4層までの擾乱が著しく、北東側で礫の抜き取りが顕著であったため、元形態、元規模は不明である。礫の大きさは10～15cmと粒揃いであり、SX1～2と比べると角礫の安定面を上方に向けて配する。円礫が一定量認められる。SX1～2のような部分的な礫積みの様相は認められない。敷石の上端は安定しており、意識的な礫の取捨選択が認められる。上端レベルは標高5.2～5.3m。石種はSX1～2で主体を占めたチャート、緑色岩に加えて花崗岩、砂岩を積極的に採用する。花崗岩礫が被熱によって特に赤変する。SX3に伴って製塩土器片183点(11～14)、製塩土器支脚片1点が出土した。

SX4は、元規模は不明であるが、比較的厳密な方形の平面形態をもつものと推測される。南東-北西検出1.7m、北東-南西検出1.3mの範囲に、25～40cm程の大ぶりの自然礫の安定面を上方に向けて密接させて配するが、南西隅に約50cmの巨礫を配することで明確に隅部を造り出し、敷石南端列3石、及び2列

目の4石は長辺を敷石の軸方向となる南東-北西方向に目地を描いて配して縁部を構成する。隙間は小円礫で充填する。さらに北側では敷石の軸にとらわれることなく、隙間に大きな隙間ができないように空間を消しながら小ぶりな礫を並べる。西側の調査区外に向けて小円礫を密に敷き並べながら展開する。敷石上端レベルは標高5.7mで、ほぼ水平である。石種はチャート、緑色岩に加えて、頁岩を積極的に採用する。敷石上は灰、炭、焼土を非常に多く含んだ第5層の黒褐色土が全体的に覆い、礫表面の恒常的な被熱による赤変、風化が相当進み、剥離が著しい。敷石南西側の第6層上面は被熱によって土壌が赤変する。明確にSX4に伴う遺物は出土していない。

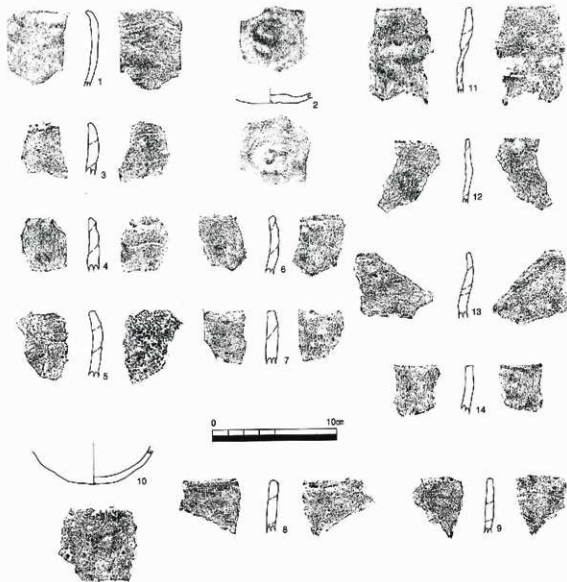


第26図 SX1~4平面・断面図(縮尺1/25)



#### 4 出土遺物

いずれも製埴土器。1は緩やかに内傾し、口唇部が強く内屈する口縁部をもつ。土師質で、器厚は薄く、外面には指頭圧痕が部分的に残り、内面に丁寧なナデを施す。径は15cm程に復元できる。1と同一個体とも考えられる2は底部であり、径の小さい平底状である。外面中央部分に小穴が穿たれ、その周囲には強い指押さえ痕を残す。内面に全周するハケメを施す。3～7は微かに内屈する口縁部をもつ。5～7は口唇部断面が切られ、面をなす。いずれも外面に1～2条の輪積み痕を残す。内面はナデ。いずれも土師質。8～9は7に近い口縁部の形態をもち、器面調整は3～7と共通する。3～9の径は20cm内外に復元できる。10は底部。外面に指押さえ痕が残る。11～14はやや直立気味にのびる体部から一端外方に開き、さらに内傾する口縁部をもつ。外面には1～2条の輪積み痕を残すが、14の外面はナデによって調整される。内面は強いナデ。11、14の口唇部断面が切られる。11～12の器壁は3～9に比べてやや薄い。11～14の径は20cm以上に復元できる。表面調整は3～7と同様である。8・12～13は須恵質。



第27図 出土遺物実測図 (縮尺1/3)

番号	遺物・部位	形状	材料	用途	寸法 (mm)			製作技法・調整・加工	出土・出土地	年代	保存	備考
					長さ	幅	その他					
1	SX.1	丸型	—	—	—	—	—	外周部削り出し	西宮「聖心」	西(遺跡)	奈良県	1世紀
2	SX.1	丸型	—	—	—	—	—	外周部削り出し	西宮「聖心」	西(遺跡)	奈良県	1世紀
3	SX.1	丸型	—	—	—	—	—	外周部削り出し	西宮「聖心」	西(遺跡)	奈良県	1世紀
4	SX.1	丸型	—	—	—	—	—	外周部削り出し	西宮「聖心」	西(遺跡)	奈良県	1世紀
5	SX.1	丸型	—	—	—	—	—	外周部削り出し	西宮「聖心」	西(遺跡)	奈良県	1世紀
6	SX.1	丸型	—	—	—	—	—	外周部削り出し	西宮「聖心」	西(遺跡)	奈良県	1世紀
7	SX.1	丸型	—	—	—	—	—	外周部削り出し	西宮「聖心」	西(遺跡)	奈良県	1世紀
8	SX.2	丸型	—	—	—	—	—	外周部削り出し	西宮「聖心」	西(遺跡)	奈良県	1世紀
9	SX.2	丸型	—	—	—	—	—	外周部削り出し	西宮「聖心」	西(遺跡)	奈良県	1世紀
10	SX.2	丸型	—	—	—	—	—	外周部削り出し	西宮「聖心」	西(遺跡)	奈良県	1世紀
11	SX.3	丸型	—	—	—	—	—	外周部削り出し	西宮「聖心」	西(遺跡)	奈良県	1世紀
12	SX.3	丸型	—	—	—	—	—	外周部削り出し	西宮「聖心」	西(遺跡)	奈良県	1世紀
13	SX.3	丸型	—	—	—	—	—	外周部削り出し	西宮「聖心」	西(遺跡)	奈良県	1世紀
14	SX.3	丸型	—	—	—	—	—	外周部削り出し	西宮「聖心」	西(遺跡)	奈良県	1世紀

表10 遺物一覧表

## 5 まとめ

調査によって石敷炉3基を検出した。いずれも海岸段丘面での検出であり、西側の山裾開削面には遺跡の範囲が及ばないものと思われる。今後の調査で段丘面上での南北の広がりを把握する必要がある。

石敷炉SX1～3をみると、いずれも元来の平面形態は不明であるが、礫の規格性に乏しく、高い礫密集度を保ち、上端レベルが一定ではない敷石の造作が認められるSX1～2と、比較的大きさの似通った造作を用い、礫上端に安定面を作り出して整然と並べようとした敷石の造作が認められるSX3とで構造差が認められる。検出層序から判断してSX1～2からSX3へと移行する前後関係が存在するものの、大きな時期差を示すものではないと推測される。共存製塩土器群は口縁部形態、表面調整から浜瀬ⅡB式後半期の範疇に含まれるが、製塩土器1～2にみる薄手で浜瀬ⅡB式前半期の形態に近いと思われる個体がSX1共存資料に混在し、かつSX1～2共存製塩土器について器厚が7mmにピークに分布し、口縁部形態が内屈するものが主体を占める(SX1:26点/29点、SX2:13点/15点、SX3:8点/14点)ことに対して、SX3共存製塩土器は復元径が比べてやや大きくなり、やや外に開く体部から内屈する口縁部形態をもつものを新出させ(6点/14点)、かつ器厚が7mmにピークにもちながらさらに厚みを増す個体が増加するなど、遺物の時期差が遺物にも表出する。

SX4については、共存製塩土器が存在しないため、その性格、時期は判然としえない。石敷形態が船岡式併行期のもとの一見似通っているが、敷石の隅部を明確に意識しており、かつ6世紀後半の遺物を包含する堆積土を明らかに盛土、整地した上で敷石の造作が認められることから近世建物の雨落ち部分として捉えた方が妥当かもしれない。

なお、三辻利一氏のご配慮により、11～14の4点の個体について蛍光X線分析を行ったところ、興遣寺窯出土須恵器との同属性を示した。詳細は別稿に譲るが、獅子塚古墳から興遣寺古墳群へと引き継がれる古墳時代後期の耳川流域首長集団により継続的な土器製塩が行われた可能性が推測される。

### [引用・参考文献]

- 網谷克彦 1995 『松原遺跡の発掘調査』『教員論叢(教養女子短期大学紀要) 第10号』教養女子短期大学  
 網谷克彦 1980 『11 松原遺跡』『福井県嶺南地方の考古学』嶺南地方の考古学を学ぶ会  
 石部正志 1966 『考古学的考察 1. 製塩遺跡に関する考察』『若狭大坂 一福井県大坂町考古学調査報告一』大坂町教育委員会  
 入江文敏 1987 『Ⅷ. 付1 若狭における古瀬時代土器製塩についての覚え書き 一 大坂町大島浜遺跡・宮留遺跡の発掘調査から一』『大坂町文化財調査報告書第4集 大島浜遺跡・宮留遺跡』大坂町教育委員会  
 大森安・芝田寿郎 1980 『Ⅴ. 若狭の土器製塩について』『岡津製塩遺跡 一第1次・第2次発掘調査報告一』小浜市教育委員会  
 福井県立若狭歴史民俗資料館 1988 『塩 一生産の歴史 三千年一』  
 福井県立若狭歴史民俗資料館 1999 『若狭の古代遺跡 発掘の成果と出土品』  
 森川昌和 1986 『若狭地方における製塩土器編年のまとめ』『福井県史 資料編13 考古一本文編一』福井県

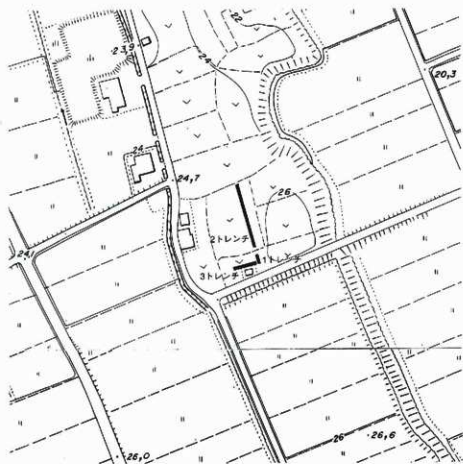
## VII 興道廃寺遺跡（淵ノ上1区）調査報告

### 1 調査概要

調査地は興道廃寺遺跡の北側、及び興道寺遺跡東縁部に位置し、標高約25mの耳川左岸の低位段丘面に立地する。大正時代に泉農事試験場（県園芸試験場）建築に伴って古瓦が出土したことによって古代寺院址の存在が注目され始め、その後1958年に試験場地内から軒丸瓦がほぼ完形で出土し、該地の小字観音の畑地から凹面に布目痕を残す多くの瓦片が採集されたことなどによって、地元では「観音畑（廃寺）」と称され、段丘面の最高位付近に古代寺院の存在が推定されてきた<sup>41）</sup>。

遺跡は古代寺院址の存在が強く認識され、茶の栽培地でもあったことから主だった開発を逃れて遺跡を今日に伝えている。しかし、近年周辺の興道寺遺跡内では開発事業が盛んに行われており、将来的な現状保存を考慮して遺跡の内容確認を行う必要があった。

調査は推定地南側の遺構存否、遺構残存度を確認するために南北方向に1-2トレンチ（南北約53m×東西約2.5m）、東西方向に3トレンチ（東西約15.5m×南北約2.0m）を設定した<sup>42）</sup>。試掘調査面積は192㎡である。



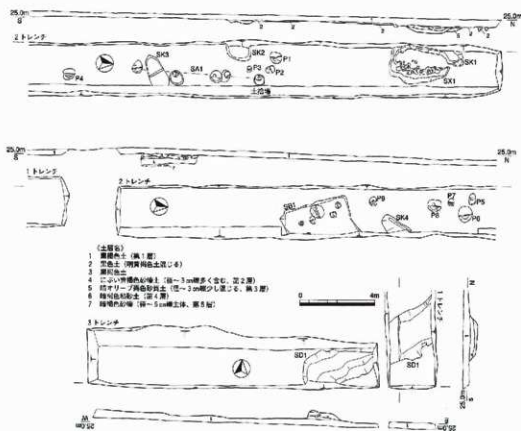
第28図 調査区位置図（縮尺1/2,500）

### 2 基本層序

上層から、第1層：黒褐色土（耕作土）、第2層：にぶい明褐色砂礫土（段丘表層）、第3層：暗オリーブ褐色砂質土（段丘構成層）、第4層：暗褐色粘砂土（段丘構成層）、第5層：暗褐色砂礫（段丘構成層）である。第1層から須恵器杯H蓋1点、土師器甕1点を採集した。

該地で普遍的に分布する表土下の黒褐色土系の遺物包含層は、調査地が段丘面の最高位であることから既に削平されて存在しない。遺構面となる第2層上面は1トレンチ南端付近を標高約25.2mの最高位として2トレンチ北端に向けて標高24.6mまで低下する緩やかな傾斜をもち、かつ3トレンチ西端に向けて標高24.3mまで低下する傾斜をもつ。第2層下は砂質土、砂礫が順に堆積し、典型的な段丘上位層の実態を示している。2トレンチ南端、及び北端では第2層上に耕作攪乱を挟み、攪乱範囲から須恵器杯H蓋1点、

寛5点、平瓦1点、土師器壺16点、製塩土器11点などの多くの破片を採集した。また、3トレンチにみる第2層上面の人為的な段状平坦面は、茶、牛蒡などの耕作に伴う削平に伴うものである。



第29図 調査区平面・土層断面図 (縮尺1/200)

### 3 検出遺構

調査に際しては、第2層上面に精査の主眼をおいた。検出された遺構は、竪穴建物1棟 (SB1)、柱列1基 (SA1)、土壇状遺構 (SX1)、土坑4基 (SK1~4)、溝1条 (SD1)、小穴9基 (P1~9)である。

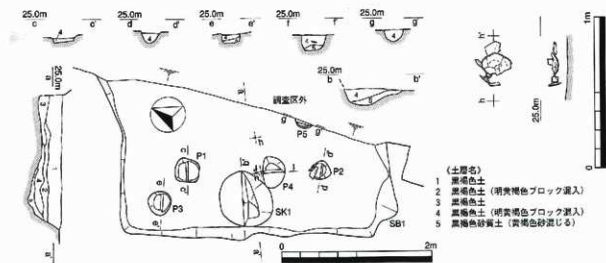
#### 竪穴建物

SB1はやや歪な方形であるものと思われ、建物西縁掘り形の南北軸は23度西偏する。南北3.64m、南縁の一边が3.68m、深さ0.27m。明黄褐色土が混じる黒褐色土を覆土にもつ。床面の標高は約24.8m。検出範囲内で中央付近がやや高くなる凹凸をもつ。貼床面はもたず、第3層上面まで掘り抜いて細かい砂質土面を露出させている。床面に伴う遺物はなく、覆土からいずれも破片で須恵器杯II蓋12点 (1~2)、杯II 3点 (3)、壺7点 (4)、壺類2点、不明2点、土師器壺80点 (5~7)、製塩土器102点 (8~9)が出土した。製塩土器8は比較的床面に近いレベルから横位に潰れた状況で出土している。床面南西隅付近の覆土中に明黄褐色土ブロックが検出されたが、床面にカマドの痕跡は認められなかった。

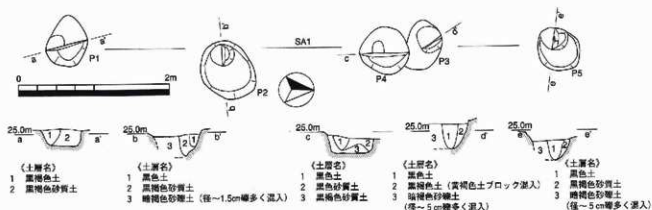
建物には土坑1基（SK1）、柱穴2基（P1～2）、小穴3基（P3～5）を伴う。

SK1はSB1西縁中央部で検出した。南北0.74m、東西0.64mの円形である。深さ0.23m。埋土に明黄褐色土ブロックが混じる黒褐色土、明黄褐色砂が混じる黒褐色砂質土をもつ。埋土から土師器甕片8点（10）、製塩土器片4点（11）が出土した。

P1～5は円形の掘り形をもつ。底面レベルにばらつきがあり、いずれも黒褐色土からなる埋土をもつ。明確な柱当たりは認められないものの、P1～2がSB1の主柱穴を構成し、その配置から調査区外の2基を含めて建物の対角線上に配されると思われる。P2埋土から土師器甕片1点、製塩土器片3点が出土。製塩土器3点の内、2点が製塩土器8と接合関係にある。



第30図 SB1平面・断面図（縮尺1/50）



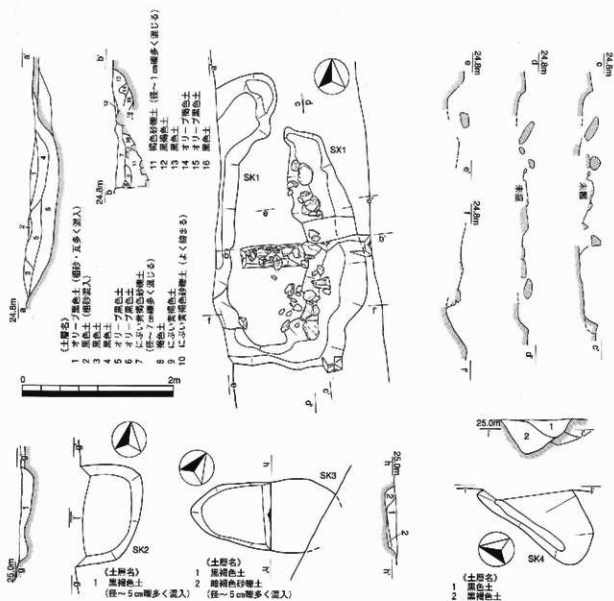
第31図 SA1平面・断面図（縮尺1/50）

## 柱列

SA1はSB1の北側で南北3間を検出した。南北軸は磁北に一致する。P1～5の5基の柱穴によって構成される。P4がP3を切る。いずれも円形の掘り形をもち、径0.7m内外と収まっているが、底面レベルにややばらつきがある。標高24.7m前後。いずれも明確な柱当たりをもち、柱痕部分に黒色土、黒褐色砂質土を、掘り形の部分に暗褐色砂礫土をもつものが多い。出土遺物はない。

## 土壇状遺構

SX1は南北3.24m、東西検出1.92mの平坦面を検出した。最大幅0.79m、最小幅0.24m、最深部0.26mの溝を平坦面の東側と南側に巡らせることによって外側と区画する。溝は黒褐色土系の堆積土をもち、土師器甕細片1点が出土した。東側の溝内側の立ち上がりは5~30cm程の礫を積むようであるが、元位置を保つのは南東隅付近の2段までの礫積み部分である。須恵器杯B蓋、皿、平瓦片など律令期の遺物が混じる耕作攪乱が上位を覆っており、既に礫積みの大半が失われているか崩されているものと考えられる。平坦面の断ち割りによって、礫積み裏込め、及び掘り形が存在しないことを確認した。平坦面東縁部に約30cm程の礫を横位に据え、方位を磁北に一致させる2間からなる礎石状の配石を検出した。溝内面の礫積み最上位、標高24.8mに位置する。平坦面西側には調査区外に展開するSK1が位置するが、SK1埋土最上位に検出幅0.9m、オリブ黒色土に砂利ともいえる極めて粗い砂を叩き締めた層を検出した。丸瓦片6点(12~14)、平瓦片6点(15)が密に混入しており、この部分はSX1に伴うものと考えられる。



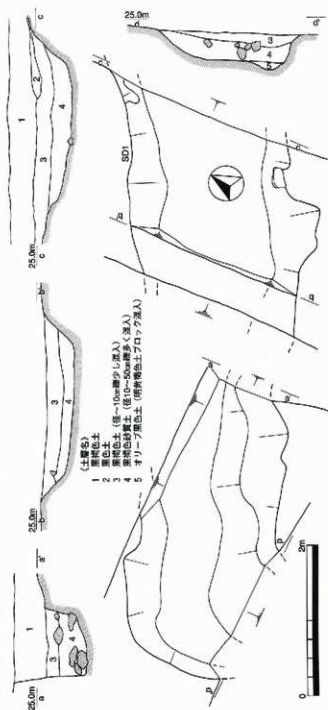
第32図 SX1・SK1~4平面・断面図 (縮尺1/50)

## 土坑

SK 1は南北3.0m、東西検出0.9m、蛇行する溝状の平面形である。深さ0.46m。埋土から須恵器短脚高杯脚部片1点、土師器甕片48点(16~17)、碗2点(18~19)が出土。SK 2は南北1.36m、東西検出0.72mの隅丸の方形である。深さ0.19m。SK 3は東西検出1.92m、南北0.97mの長楕円形。深さ0.15m。SK 2、SK 3ともに底面まで極めて浅い。SK 3埋土から須恵器平瓶1点(20)、土師器小型甕1点(21)、甕片1点、碗1点(22)、製塩土器片4点が出土。SK 4は南北1.63m、東西0.83mの楕円形。深さ0.46m。

## 溝

SD 1は北東-南西の方向に展開し、検出長7.30m、最大幅2.05m、最深部0.60m。検出南西端で南東に折れる様相を確認した。船底状の断面形をもち、10cmまでの礫が混じる黒褐色土、10~50cmまでの礫が多量に混じる黒褐色砂質土、オリーブ褐色土を埋土にもつ。埋土からいずれも破片で須恵器杯H蓋5点、杯H 2点(23)、甕6点、壺類2点、瓶類1点(24)、器台脚部2点(25~26)、不明2点、土師器甕39点(27)、製塩土器13点が出土した。南西端付近で溝の立ち上がりに沿って貼り付けている状況にある礫1点を確認したが、それが全面にわたる様相は認められない。



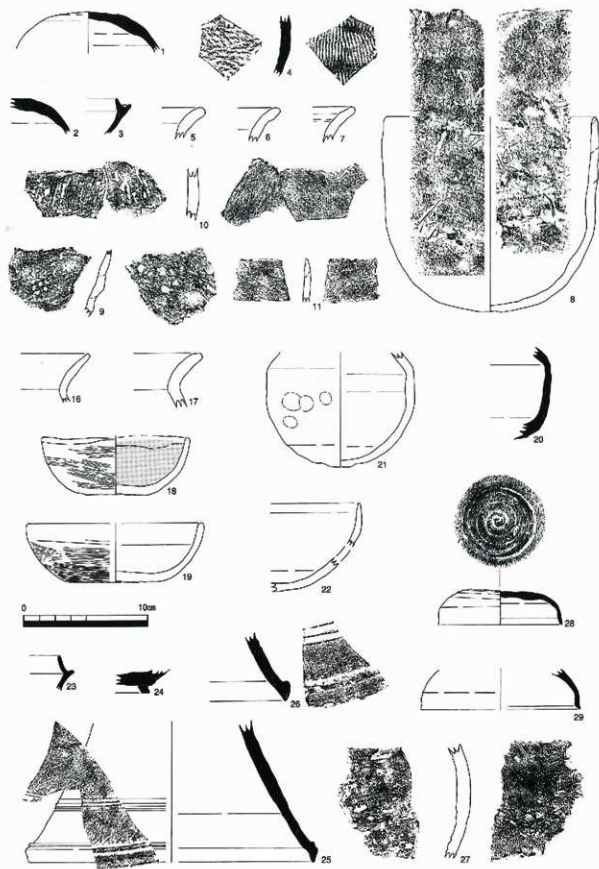
第33図 SD 1平面・断面図(縮尺1/50)

## 小穴

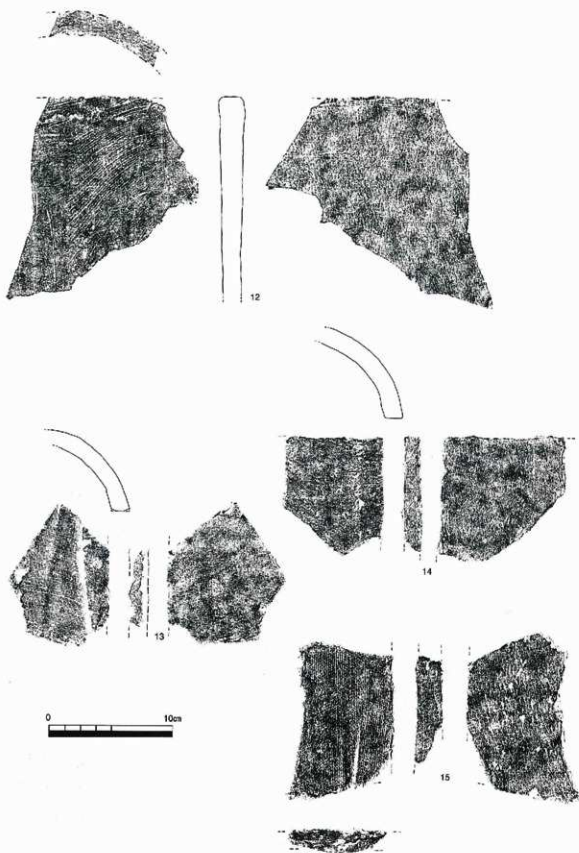
SB 1、SA 1を構成しないものに9基(P 1~9)がある。いずれも円形の平面形をもち、P 7~9には柱当たりを残す。P 1埋土から須恵器杯B蓋片1点、土師器甕片1点、P 2埋土から須恵器壺蓋1点(28)、P 3埋土から土師器甕片1点、P 5埋土から須恵器杯H蓋片1点(29)、P 6埋土から土師器甕片1点、P 8埋土から土師器甕片5点、製塩土器片17点が出土した。







第34図 出土遺物実測図1 (縮尺1/3)



第35図 出土遺物実測図2 (縮尺1/3)

部端部は下方に折り返して丸くおさめる。外面は2条の沈線と1条の突線で区画し、波状文を施す。27は上師器莞胴部片。器壁は厚く、外面にハケメ、内面にケズリを施す。28は須恵器壺蓋。口径9.8cm、器高2.8cm。扁平な天井部をもち、緩やかに口縁部に至る。端部は丸く鋭く収める。天井部内面に当て具痕が残り、外面はヘラ切り後、渦巻状のヘラ描きを施す。作りは精巧。29は須恵器杯H蓋口縁部片。外面肩部に明瞭な稜を残さず、緩やかに口縁部に至る。端面には凹線が残る。

番号	発出・単位	発見品名	出土層	寸法	出土・出土位置	出土・出土位置	出土・出土位置	出土・出土位置	出土・出土位置
1	S 3-1 土曜土	須恵器	埴輪	13.0	4.8	外周部(外へ下) 須恵器	平中( 須恵器) 須恵器	須恵器	須恵器
2	S 3-1 土曜土	須恵器	埴輪	13.0	4.8	外周部(外へ下) 須恵器	平中( 須恵器) 須恵器	須恵器	須恵器
3	S 3-1 土曜土	須恵器	埴輪	13.0	4.8	外周部(外へ下) 須恵器	平中( 須恵器) 須恵器	須恵器	須恵器
4	S 3-1 土曜土	須恵器	埴輪	13.0	4.8	外周部(外へ下) 須恵器	平中( 須恵器) 須恵器	須恵器	須恵器
5	S 3-1 土曜土	須恵器	埴輪	13.0	4.8	外周部(外へ下) 須恵器	平中( 須恵器) 須恵器	須恵器	須恵器
6	S 3-1 土曜土	須恵器	埴輪	13.0	4.8	外周部(外へ下) 須恵器	平中( 須恵器) 須恵器	須恵器	須恵器
7	S 3-1 土曜土	須恵器	埴輪	13.0	4.8	外周部(外へ下) 須恵器	平中( 須恵器) 須恵器	須恵器	須恵器
8	S 3-1 土曜土	須恵器	埴輪	13.0	4.8	外周部(外へ下) 須恵器	平中( 須恵器) 須恵器	須恵器	須恵器
9	S 3-1 土曜土	須恵器	埴輪	13.0	4.8	外周部(外へ下) 須恵器	平中( 須恵器) 須恵器	須恵器	須恵器
10	S 3-1-S K 1 土曜土	須恵器	埴輪	13.0	4.8	外周部(外へ下) 須恵器	平中( 須恵器) 須恵器	須恵器	須恵器
11	S 3-1-S K 1 土曜土	須恵器	埴輪	13.0	4.8	外周部(外へ下) 須恵器	平中( 須恵器) 須恵器	須恵器	須恵器
12	S 3-1-S K 1 土曜土	須恵器	埴輪	13.0	4.8	外周部(外へ下) 須恵器	平中( 須恵器) 須恵器	須恵器	須恵器
13	S 3-1-S K 1 土曜土	須恵器	埴輪	13.0	4.8	外周部(外へ下) 須恵器	平中( 須恵器) 須恵器	須恵器	須恵器
14	S 3-1-S K 1 土曜土	須恵器	埴輪	13.0	4.8	外周部(外へ下) 須恵器	平中( 須恵器) 須恵器	須恵器	須恵器
15	S 3-1-S K 1 土曜土	須恵器	埴輪	13.0	4.8	外周部(外へ下) 須恵器	平中( 須恵器) 須恵器	須恵器	須恵器
16	S 3-1-S K 1 土曜土	須恵器	埴輪	13.0	4.8	外周部(外へ下) 須恵器	平中( 須恵器) 須恵器	須恵器	須恵器
17	S 3-1-S K 1 土曜土	須恵器	埴輪	13.0	4.8	外周部(外へ下) 須恵器	平中( 須恵器) 須恵器	須恵器	須恵器
18	S 3-1-S K 1 土曜土	須恵器	埴輪	13.0	4.8	外周部(外へ下) 須恵器	平中( 須恵器) 須恵器	須恵器	須恵器
19	S 3-1 土曜土	須恵器	埴輪	13.0	4.8	外周部(外へ下) 須恵器	平中( 須恵器) 須恵器	須恵器	須恵器
20	S 3-1 土曜土	須恵器	埴輪	13.0	4.8	外周部(外へ下) 須恵器	平中( 須恵器) 須恵器	須恵器	須恵器
21	S 3-1 土曜土	須恵器	埴輪	13.0	4.8	外周部(外へ下) 須恵器	平中( 須恵器) 須恵器	須恵器	須恵器
22	S 3-1 土曜土	須恵器	埴輪	13.0	4.8	外周部(外へ下) 須恵器	平中( 須恵器) 須恵器	須恵器	須恵器
23	S 3-1 土曜土	須恵器	埴輪	13.0	4.8	外周部(外へ下) 須恵器	平中( 須恵器) 須恵器	須恵器	須恵器
24	S 3-1 土曜土	須恵器	埴輪	13.0	4.8	外周部(外へ下) 須恵器	平中( 須恵器) 須恵器	須恵器	須恵器
25	S 3-1 土曜土	須恵器	埴輪	13.0	4.8	外周部(外へ下) 須恵器	平中( 須恵器) 須恵器	須恵器	須恵器
26	S 3-1 土曜土	須恵器	埴輪	13.0	4.8	外周部(外へ下) 須恵器	平中( 須恵器) 須恵器	須恵器	須恵器
27	S 3-1 土曜土	須恵器	埴輪	13.0	4.8	外周部(外へ下) 須恵器	平中( 須恵器) 須恵器	須恵器	須恵器
28	S 3-1 土曜土	須恵器	埴輪	13.0	4.8	外周部(外へ下) 須恵器	平中( 須恵器) 須恵器	須恵器	須恵器
29	S 3-1 土曜土	須恵器	埴輪	13.0	4.8	外周部(外へ下) 須恵器	平中( 須恵器) 須恵器	須恵器	須恵器

表12 遺物一覧表

## 5 まとめ

調査によって5世紀後半の土坑1基(SK1)、7世紀前半の堅穴建物1棟(SB1)、土坑1基(SK3)といった古墳時代後期に伴う集落に関連する遺構、及び7世紀後半の土壇状遺構1基(SX1)、8世紀前半の溝1条(SD1)、柱列1基(SA1)といった飛鳥期から律令期までに伴う興道廃寺に関連すると思われる遺構を検出した。

堅穴建物SB1は、(正)方形の平面形の対角線上に4本の主柱穴を配する典型的な堅穴建物構造を示している。カマドなどの火焔を有さない点を含め、福井県埋蔵文化財調査センター調査地B区SH01と共通しており(鈴木2002)、遺跡内の古墳時代後期の普遍的な堅穴構造であるものと考えられる。福井県埋蔵文化財調査センター調査地の調査内容を合わせて集落立地を考慮すれば、該期には興道廃寺推定地付近の段丘面北東縁部の高位面<sup>23</sup>を積極的に選地した集落形成が行われたものと推測され、1998年に美浜町教育委員会が実施した遺跡分布調査<sup>24</sup>において把握した、古墳時代後期の遺物採集が本調査地周辺に限定されるのに対して律令期以降の遺物散布域が南西に向かって大きく広がる動向とも重複する。自然流路、低位面を挟んで西側高位面における興道寺古墳群の立地、東側高位面における興道寺遺跡の立地にみる墓域と居住域との区分けが明瞭である。

興道廃寺に関連すると思われる柱列SA1、土壇状遺構SX1、溝SD1について、SX1平坦面上に何らかの建物施設が存在し、またSD1が寺院推定地内を走るものと推測されるが、現段階での各遺構の性格付けは困難であり、周辺の調査を踏まえて検討したい。なお、SA1の南北軸、及びSX1東縁礎石状配石の南北軸が磁北に一致する点で、上井ノ上1区堅穴建物SB1~2、掘立柱建物SH1などの該期建物方位と共通し、平城I~II型式併行期を中心とした7世紀後葉から8世紀前半までの敷地における建物方位の特徴として抽出できるものと考えられる。

註

- <sup>21</sup> 先学研究に出土、採集の軒九瓦、軒平瓦の検討、分析がある（水野1987）。
- <sup>22</sup> 興道院寺遺跡内において過去に行われた調査を以下のとおり、区分した。  
観音 1区 1998年調査 内容確認による試掘調査（既報）  
洞ノ上1区 2002年調査（本報告本章）
- <sup>23</sup> 本報告 I、註2参照。
- <sup>24</sup> 茨浜町教育委員会が1998～1999年に実施。未報告。

[引用・参考文献]

- 鈴木真友美 2002 「興道寺遺跡」『第17回発掘調査報告会資料』福井県教育庁埋蔵文化財調査センター
- 松葉竜司・妙本真友美 2002 「7. 興道寺遺跡」『福井県嶺南地方の考古学』嶺南地方の考古学を学ぶ会
- 松島龍司 2002 「8. 興道院寺遺跡」『福井県嶺南地方の考古学』嶺南地方の考古学を学ぶ会
- 水野和雄 1987 「3. 興道院寺」『北陸の古代寺院 その源流と古瓦』北陸古瓦研究会

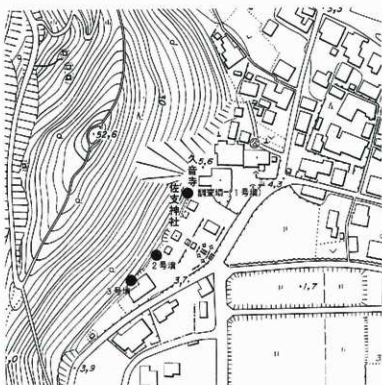
## VIII 寺山古墳群（1号墳）調査報告

### 1 調査概要

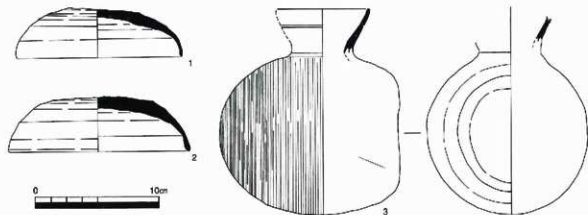
調査地は久々子湖畔北東に位置する飯切山東側の標高約10～13mの山裾部に位置する。古くより横穴式石室が露出していたことから、佐文神社から瑠璃寺背後に3基の古墳の存在が知られていた。調査墳である1号墳は墳丘南側の土取り、飯切山山頂への歩道整備によって既に地形が改変され、北側は墳丘裾部付近まで大規模な土取りが及び、墳丘上の流出、横穴式石室の露出を招いている。2号墳は露出石室の上に巨木が植生し石室を押し潰し、墳丘上の大半が流出する。3号墳は小規模な土取りにより石室前面が削り取られ、岩盤が露頭する。

古墳群に伴う資料を美浜町教育委員会が保管している。須恵器杯口蓋

2点（1～2）は不詳発見資料であり、出土年月、正確な出土地は不明。飯切山裾を切る集落道路建設に伴って出土したものと思われる。1は口径13.2cm、器高5.0cm。2は口径14.4cm、器高5.4cm。いずれも外面肩部に明確な稜を残さず、丸みを帯びて口縁部に至る。天井部外面に回転ヘラ削りを施す。6世紀末頃の所産。同図須恵器横瓶（3）は昭和10年に寺山から出土。3は体部前面に細かいカキ目調整を施す。7世紀前半の所産。



第36図 調査区位置図（縮尺1/2,500）



第37図 伝古墳群出土須恵器実測図（縮尺1/3）

該地には6世紀後半から7世紀前半までの群集墳形成があったものと推測されるが、調査地周辺では佐支神社、瑠璃守などの寺社建造物建築などに伴って従前、大規模な土取りが行われており、現存する3基を除いて大半の古墳が消滅したものと考えられる。将来的な本格調査の可能性を後に残しつつ、保存状態が極めて悪い1号墳について墳丘、埋葬施設の様相を把握するために試掘調査を実施した。



写真4 2号墳

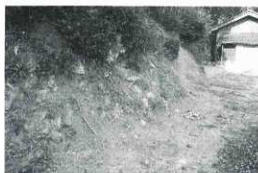
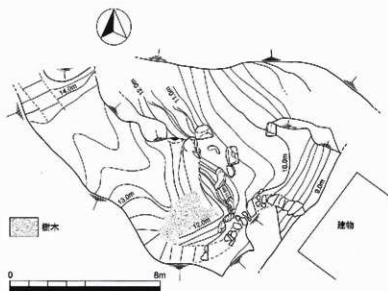


写真5 3号墳

## 2 現況地形

本来の旧地形は東、または南東に向けて低下する緩斜面であったものと考えられるが、北側、及び南西側が既に削平され、古墳が辛うじて現存する状況にあるなど詳細は分からない。口碑によれば、この付近の岩盤となる花崗岩風化土が建物壁土に適しているため、古墳周辺が絶えず小規模な土取りを受けたようであり、現代瓦、プラスチック容器が散乱するなど現代に至るまで継続的な土地改変があったことが伺える。調査に際して等高線幅0.2mとする現況地形測量を行った。標高約10m付近に、墳丘東側裾部が認められる円墳である可能性を感じたが、現地形に墳形、規模の反映は認められない。

調査前の石室の現況は左側壁が石材転用によって全て失われ、標高約11m前後に奥壁、奥壁寄りの右側壁の上位が露出していた。さらに石材転用、盗掘などの名残を示す天井石に相応しい巨石が石室内、石室外東側に散乱していた。あるいは石室西側には巨木が植生し、左側壁を内側に押し出している。開口部付近は山頂に至る歩道が整備されており、調査前にその様相を確認できなかった。



第38図 1号墳地形測量図(縮尺1/200)

## 3 検出遺構

地形測量から墳丘東側裾部と想定された部分を含み、石室の東側に約3.2m×約1.5mのトレンチを設定して表上の腐葉土を除去したところ、トレンチ北西隅で礎石を検出したため、トレンチをさらに南にずらし、東に約2.9m延長した。また、前述のとおり左側壁が既に失われていることから、この墳丘トレンチから連続する床面精査のためのトレンチを設定して南に掘り進めたが、右側壁が巨木根の影響で大きく内傾する

など、作業の安全を確保する上で床面の検出は奥壁から約2.6mまでに留めた。なお、石室開口部の様相を確認するために約1m四方のトレンチを合わせて設定した。調査面積は8㎡。調査によって1号墳の石室の一部と墳丘部分東側の様相を確認した。

### 墳丘

標高約9.5mに墳丘東側裾部が残存する推定径約10m程の円墳と考えられる。

トレンチの東端、標高9.5～9.7mに礫群を検出した。20cm内外の円礫、角礫を約0.5mの幅に密に並べるように分布し、部分的に二段に積む。東側の墳丘外に構成材と思われる礫が散在する。礫群の内側には標高9.6mまで暗褐色砂質土、暗褐色土によって裏込めするように墳丘基底部を形成する。

墳丘上は石室から東に約3.2mまでが全て消失し、標高10m前後に岩盤となる花崗岩風化土が露頭する。前述の礫群内側の裏込め土上位に標高9.9mまで礫混じりのぶい黄褐色土を盛土する。礫群東側の墳丘外には岩盤上を掘り残したテラス状の平坦面がみられることから周溝の存在は考えられない。

石室構築に伴い岩盤を掘り込んだ墓坑の一部を右側壁の最北部分で検出した。岩盤の花崗岩風化土を二段に掘り込み、褐色、黄褐色系の砂質土を裏込めする。

### 埋葬施設

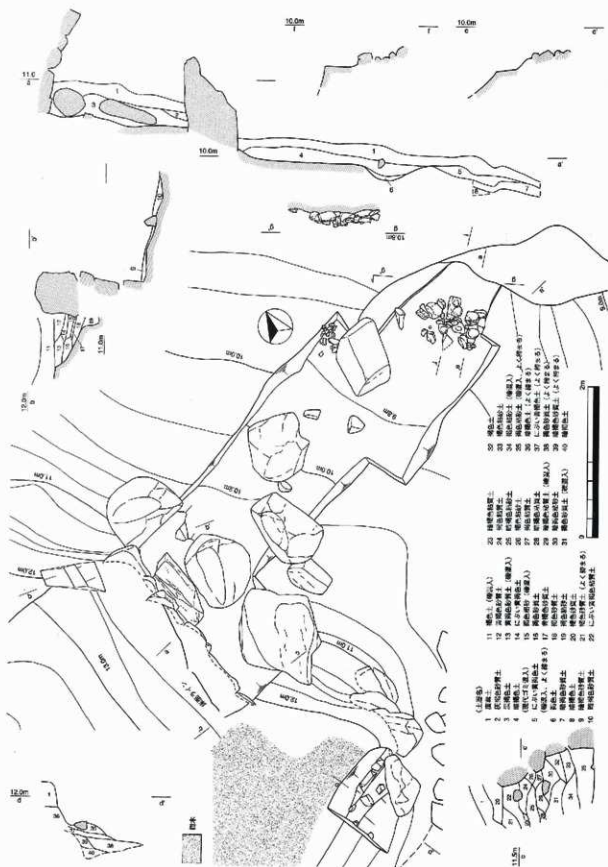
磁北から6度東偏する南北方向に主軸をもつと思われる横穴式石室であり、南に開口する。

石室規模は奥壁から開口部石積み内側までの長さ推定約5.0m、石室幅奥壁付近0.75m、石室現存最大高1.77mである。石室使用石材は全てチャート。周辺にはチャート岩盤の露頭が認められることから、近接地より運ばれたものと推測される。

石室構造は、奥壁で1石が残るのみであり、縦約1.3m、横約1.0mの「鏡石」ともいえる巨礫を縦位に墓坑に直接据えている。右側壁基底部は、奥壁から3石目、4石目が基底石に相応しい大ぶりな礫を縦位に据え、奥壁から1石目はさらに小ぶりな礫を横位に二段積みすることによって目地を合わせようとするが、奥壁から2石目が縦約1.2mの巨礫を縦位に据えるためにここで目地は揃わない。この上面と目地が揃うのは他石の三段目上端である。二段目以上は横位に礫を積み上げてゆくものの明確に目地を揃えようとした整然性は認められない。四段目以降にさらに大ぶりな礫を積み上げている。全体的に雑然とした積み方をしており、礫間に5～10cm程の角礫の小口積みを多用する。右側壁の立ち上がりは、最奥部で元位置を保っており、上方を若干持ち送りながらほぼ垂直に立ち上げる。しかし、巨木根により南側に近くなるほど上位が内方に押し出され、下位が外方に引き出される断面を示し、全くその元位置を留めていない。

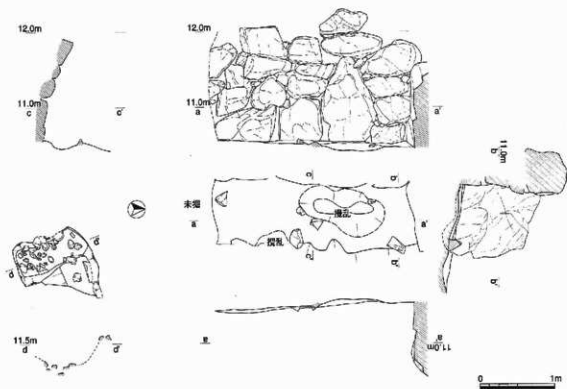
床面は墓坑上に暗褐色砂質土を埋め込むことによって構成される。崩落天井石の重力によって床面が部分的に失われる。床面の平面構造は不明。床面上には10～20cm程の5点の角礫がのるが、礫床構成材ではなく、棺台の一部であると推測される。

石室開口部において左側壁の一部と思われる1石を検出したが、元位置を保っていない。内部には10～20cm程の円礫、角礫を含む、よく締まった褐色系の砂質土を充填する。包含礫は閉塞石のように密に積み重ねたものではないが、充填土は非常によく叩き締められており、開口部の閉塞のために行われたものと推測される。



第39図 1号墳平面・断面図 (縮尺1/50)





第40図 1号墳石室図 (縮尺1/50)

#### 4 まとめ

調査によって1号墳の横穴式石室の一部、及び墳丘東側の一部を検出した。

今回の調査では古墳に伴う副葬遺物が出土しておらず、石室構造に不明な点が多いため、明確な時期を押さえることはできないが、石室幅の減少、奥壁基底部の1石による構成、石室石材の大型化、側壁持ち送りの希薄さなどといった石室構造の要素を考慮して、1号墳は7世紀前半の時期に帰属するものと推測される。

墳丘東側裾部の礫群については、従属墳の埋葬施設とする竪穴系小石室の床面と捉えるにはプランが不明瞭であり、また外護列石と扱うには石材も全体的に小ぶりで明確な石積み認められないことから墳丘外との区画、墳丘土留めのための目的で配されたものと推測される。

寺山古墳群被葬者層は、眼下に展開する製塩遺跡である久々子遺跡の経営母体に求められる。

#### [参考・引用文献]

- 田辺常博 1997 「5. 若狭地方の横穴式石室をともなう後期古墳(円墳)について」『三方町文化財調査報告書第15集 保谷墳墓群矢竹古墳群 一帯営ふるさと森道緊急整備事業にともなう発掘調査』三方町教育委員会

## 報告書抄録

ふりがな	みほまちようないいんせいはくつちようまほうこくしよいち							
書名	美浜町内遺跡発掘調査報告書Ⅰ							
シリーズ名	美浜町埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	第5集							
編著者名	美浜町教育委員会事務局 文化財保護・町誌編纂室 学芸員 松葉竜司							
編集機関	美浜町教育委員会							
所在地	〒919-1192 福井県三方郡美浜町郷市25号25番 Tel. 0770-32-6709							
資料保管場所	美浜町教育委員会文化財保護・町誌編纂室							
発行年月日	〒919-1145 福井県三方郡美浜町金山14号1番 Tel. 0770-32-0027							
発行年月日	西暦2003年3月20日							
所収遺跡名	市町村	コード		北緯 ° ° °	東経 ° ° °	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
興道寺遺跡 (中ノ丁1区)	美浜町興道寺8号 中ノ丁37番	18442	30073	35 35 56	135 56 31	20000817～ 20000913	464	土地造成・建物建設に係る事前調査
藤ノ木遺跡	美浜町郷市18号 金廻り4番	18442	30077	35 36 10	135 56 03	20010306～ 20010308	40	住宅建設に係る事前調査
電沢寺遺跡	美浜町金山2号 野寺3番23～25	18442	30092	35 35 46	135 54 47	20010604～ 20020606 20010709～ 20010831	22 303	試験掘発掘 土地造成・建物増築に係る事前調査
興道寺遺跡 (上井ノ上2区)	美浜町興道寺 9号上井ノ上8番	18442	30073	35 35 57	135 56 34	20010723～ 20010724	56	土地造成に係る事前調査
興道寺古墳群 (中町2区)	美浜町興道寺10号 内町46番	18442	30074	35 35 58	135 56 24	20020404～ 20020412	87	土地造成・建物増築に係る事前調査
早瀬遺跡	美浜町早瀬18号中 村谷26・28番、19 号村中ノ庄7番・ 8番1・2	18442	30116	35 37 04	135 44 18	20020515～ 20020605	24	内容確認
興道庵寺遺跡 (湖ノ上1区)	美浜町興道寺6号 湖ノ上15番、26番 1	18442	30072	35 35 53	135 56 40	20020701～ 20020731	192	内容確認
寺山古墳群 (1号墳)	美浜町久々子寺山 4	18442	30088	35 36 28	135 54 39	20020924～ 20021012	面積 143 試掘 8	内容確認
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
興道寺遺跡 (中ノ丁1区)	集落跡	奈良	壁穴建物、柱列、 土坑、溝、小穴	須恵器・土師器・製塩 土器・鉄釘	奈良時代集落遺構 を検出			
藤ノ木遺跡	集落跡	古墳 奈良	壁穴建物、溝、小穴 土坑	須恵器・土師器・製塩土器 須恵器・土師器・製塩土器	古墳時代・奈良時代 集落遺構を検出			
電沢寺遺跡	集落跡	弥生後期～古墳初葉	土坑、小穴	土師器	弥生時代遺構を検出			
興道寺遺跡 (上井ノ上2区)	集落跡	奈良	土坑、小穴	須恵器・土師器・製塩土器	奈良時代集落遺構 を検出			
興道寺古墳群 (中町2区)	集落跡	鎌倉?	小穴	土師器	自然流露を検出			
早瀬遺跡	製塩跡	古墳	石敷炉 <sup>1)</sup>	須恵器・土師器・製塩土器	古墳時代製塩炉を 検出			
興道庵寺遺跡 (湖ノ上1区)	集落跡 寺院址	古墳 奈良	壁穴建物、土坑、小穴 土壇状遺構、柱列、溝	須恵器・土師器・製塩土器 須恵器・土師器・製塩土器、瓦	古墳時代集落遺構、 白鳳時代～奈良時代 寺院開闢遺構を検出			
寺山古墳群 (1号墳)	墳墓	古墳	円墳(積穴式石室・ 埋葬)		古墳時代墳墓を検出			

# 圖 版



調査前現況(南西から)



調査区北壁土層断面



調査区全景(東から)



調査区全景(西から)



SB1検出(南から)



SB1覆土壕埋没(北から)



SB1床面検出(北から)



SB1床面遺物出土



SB1完掘 (西から)



SB1-SX1検出



SB1-SX1煙道部完掘



SB1-SX1覆土層序・遺物出土



SB1-SX2検出



SB1-SX1・SX2検出



SB1-SX1断ち割り



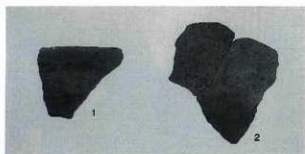
SB1-SX1・SX2振り形検出



SA1・SK2完掘



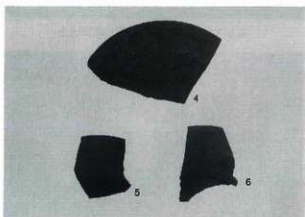
SK5完掘



SB1床面土師器壺



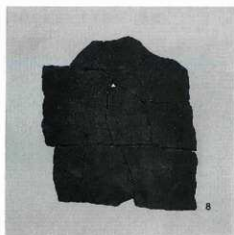
SB1床面製塩土器



SB1覆土須恵器杯類



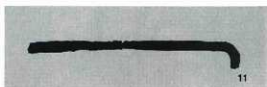
SB1覆土土師器壺



SB1覆土土師器壺



SB1覆土出土製塩土器



SB1覆土鉄釘



調査前現況（南から）



表土除去



1 トレンチ遺構検出（東から）



2 トレンチ遺構検出（東から）



SB1 床面検出（北から）



SB1 発掘（北から）



SB1 覆土遺物出土



SB1 覆土土師器出土



SB 1覆土製塩土器出土1



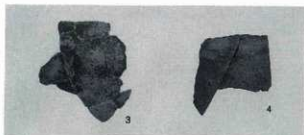
SB 1覆土製塩土器出土2



SK 1完掘 (北東から)



SD 1完掘 (南東から)



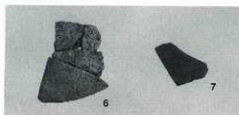
SB 1覆土製塩土器



SB 1覆土須恵器杯H蓋



SK 1埋土土師器甕



SD 1埋土須恵器甕



SB 1覆土土師器甕





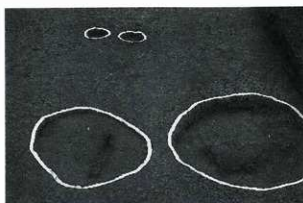
調査前現況 (西から)



調査区土層断面



調査区全景 (東から)



SK10・SK11完掘 (西から)



SK10埋土土層断面



SK11埋土土層断面



根底



SK12埋土土師器変形土器



SK13埋土土師器変形土器



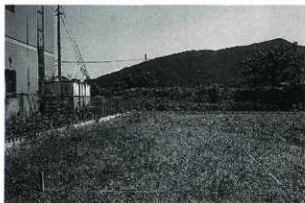
P36埋土土師器変形土器



第1層磨石



第1層土師器変形土器



調査前現況（西から）



調査区北壁土層断面



遺構検出（西から）



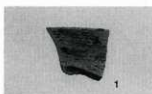
遺構完掘（東から）



SK 1完掘（東から）



SK 1埋土土層断面



SK 1埋土須恵器甕



SK 1埋土土師器甕



SK 2埋土須恵器杯B



調査前現況 (南西から)



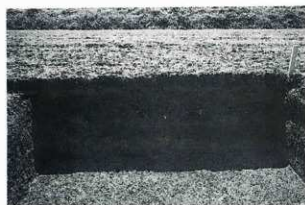
1 トレンチ南壁土層断面



2 トレンチ南壁土層断面



3 トレンチ南壁土層断面



4 トレンチ南壁土層断面



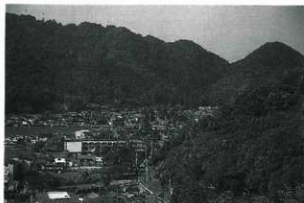
5 トレンチ南壁土層断面



6 トレンチ南壁土層断面



7 トレンチ南壁土層断面



遺跡遠景（飯切山から臨む）



1 トレンチ調査前現況（南から）



2 トレンチ調査前現況（南から）



3～4 トレンチ調査前現況（北から）



1 トレンチ南壁土層断面



2 トレンチ南壁土層断面



3 トレンチ南壁土層断面



4 トレンチ南壁土層断面



1 トレンチ完掘 (東から)



2 トレンチ完掘 (北から)



SX1 製造土器出土



SX1 検出 (東から)



SX1 製造土器出土



SX1 断ち割り



SX2 検出 (北から)



S X 3 検出 (北西から)



S X 3 礫被熱



S X 3 検出 (北東から)



S X 3 検出 (南西から)



S X 4 検出 (北から)



S X 4 検出 (西から)



2 トレンチ被熱面検出



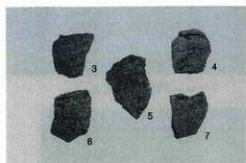
2 トレンチ断ち割り東壁土層断面



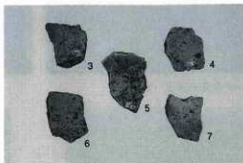
S X 1 製塩土器



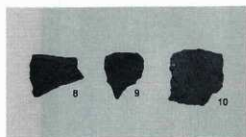
S X 1 製塩土器



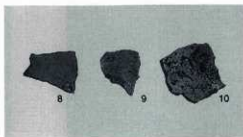
S X 1 製塩土器外面



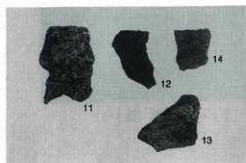
S X 1 製塩土器内面



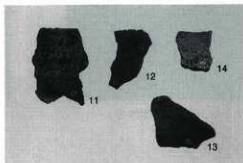
S X 2 製塩土器外面



S X 2 製塩土器内面



S X 3 製塩土器外面



S X 3 製塩土器内面



興道庵寺遺跡近景（北から）



1・2トレンチ調査前現況（北から）



3トレンチ調査前現況（東から）



2トレンチ西壁土層断面



1・2トレンチ全景（北から）



3トレンチ全景（西から）





SB 1 検出 (南西から)



SB 1 覆土土層断面



SB 1 床面検出 (北から)



SB 1 覆土製塩土器出土1



SB 1 覆土製塩土器出土2



SB 1 完掘 (南西から)



SB 1 完掘 (北西から)



SX1 検出・SK1 完掘（東から）



SX1 検出（北から）



SX1 確積み検出（東から）



SX1 溝埋土土層断面



SX1 断ち割り



SA1 検出（南から）



SK1 埋土土層断面



SK1 埋土土師器椀出土



SK3 埋土遺物出土



SD1 検出（南西から）



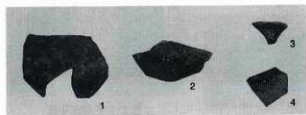
SD1 完掘（南西から）



SD1 埋土土層断面



SD1 埋没（南から）



SB1 覆土須恵器杯類・甕



SB1 覆土土師器甕



SB1 覆土製塩土器



SB 1 覆土製埴土器



SB 1-SK 1 埴土土師器甕



SB 1-SK 1 埴土製埴土器



SK 1 埴土土師器甕



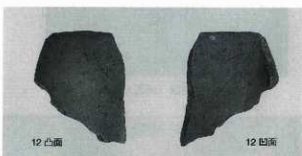
SK 1 埴土土師器椀



SK 1 埴土土師器椀



SK 1 埴土土師器甕



SX 1 平坦面丸瓦



SX 1 平坦面丸瓦



SK 3 埴土須恵器平瓶



SK 3 埴土土師器小型甕



SX 1 平坦面丸瓦



SK 3 埴土土師器椀



P 5 埴土須恵器杯H蓋



P 2 埴土須恵器蓋蓋



SX 1 平坦面平瓦



SD 1 埴土須恵器杯H・瓶・器台



SD 1 埴土土師器甕



SD 1 埴土須恵器器台



寺山古墳群近景（東から）



調査前現況（東から）



墳丘東側検出（西から）



墳丘層序



墳丘裾部破片検出（北から）



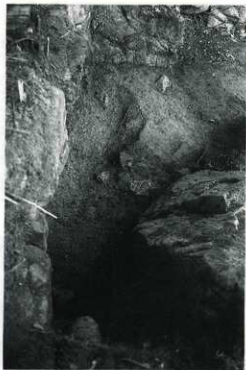
墓坑裏込土層断面



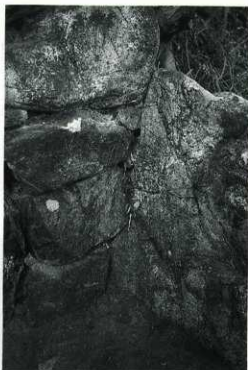
石室奥壁



石室右側壁



石室床面検出 (南から)



奥壁・右側壁隅部



右側壁崩落



石室開口部半截



閉塞石検出 (東から)

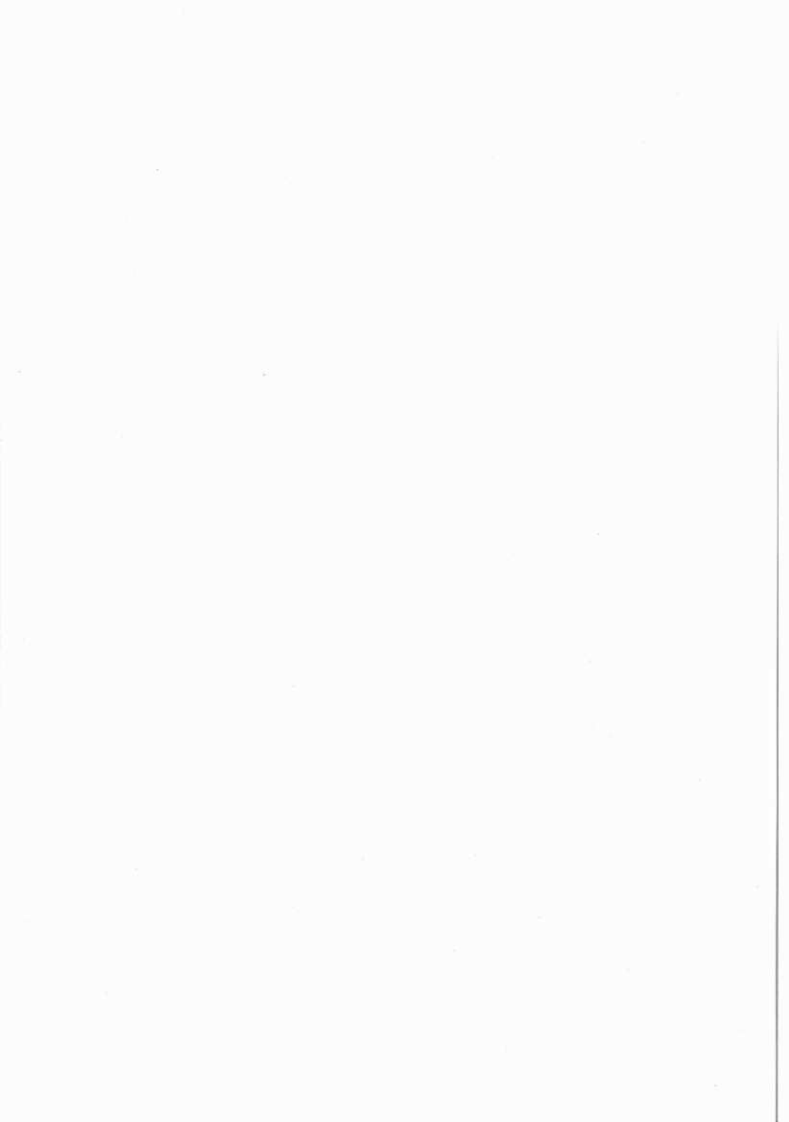
(2003年3月20日発行)  
美浜町埋蔵文化財調査報告第5集

「美浜町内遺跡発掘調査報告書Ⅰ」

発 行 美浜町教育委員会  
〒919-1192  
福井県三方郡美浜町郷市25-25  
T E L 0770-32-6709  
F A X 0770-32-1115  
印 刷 若越印刷株式会社  
〒914-0037  
福井県敦賀市道門63-10-1  
T E L 0770-22-5600  
F A X 0770-23-2288









この電子書籍は、2003年3月20日、美浜町教育委員会が発行した『美浜町内遺跡発掘調査報告書1 興道寺遺跡(中ノ丁1区)・藤ノ木遺跡・竜沢寺遺跡・興道寺遺跡(土井ノ上2区)・興道寺古墳群(中町2区)・早瀬遺跡・興道廃寺遺跡(洲ノ上1区)・寺山古墳群(1号墳)』を底本として作成しました。閲覧を目的としていますので、精確な図版などが必要な場合には底本から引用してください。

底本は、美浜町教育委員会、美浜町立図書館にあります。これ以外にも福井県立図書館、福井県教育委員会、福井県内の市町教育委員会や図書館、近隣の都道府県教育委員会や図書館、考古学を教える大学、国立国会図書館などにも寄贈・献本しています。所蔵状況や利用方法は、直接、各施設にお問い合わせください。

この電子書籍の底本作成時に他機関等から写真・図表等の提供を受けている場合がありますが、電子書籍を作成し『全国遺跡報告総覧』にアップロードする上で、複製権、公衆送信権にかかる許諾を受けていないものについては、該当部分を削除し、白抜きとしています。これらの写真等の閲覧は底本にて行ってください。

書名：美浜町内遺跡発掘調査報告書1

発行：美浜町教育委員会

〒919-1138 福井県三方郡美浜町河原市8号8番地(美浜町歴史文化館)

電話：0770-32-0027

電子書籍制作日：令和2年(2020)3月17日